

# ヒンドゥ「家族」の實態とその構造分析

中 根 千 枝

緒言

總論

1 ヒンドゥ「家族」の概念

2 ヒンドゥ「家族」の諸形態

3 「大家族」的集團

4 現實に存在する「大家族」的集團の意味

各論

1 ナンディ一族——都市近郊農村における「大家族」的集團

2 チャクロバティ一家——都市に形成された「大家族」的集團

3 アミン一族——農村における「大家族」的集團

ヒンドゥ「家族」の實態とその構造分析

## 緒 言

實態調査に基くインド社會の研究はここ十數年間に目ざましい發達をみせ、とくに社會人類學者によるとすぐれた研究が注目される。しかし、これら研究を展望してみると、その關心は主としてインド村落およびカーストに集中しており、ヒンドゥ家族自體の研究はどうしたものか驚くほど少い。

インドの大家族制とかヒンドゥ・ジョイント・ファミリーなどと、ヒンドゥ家族のあり方は、多くの人々に一應關心をもたれ、また文獻學者や法學者による尙大な研究があるにもかかわらず、その實態を社會科學の立場から分析し、家族構造を正面からとりあげた本格的な研究としては、わづかに、最近出版された、T. N. Madan のカシミール・パンディットの家族の研究、*Family and Kinship* <sup>(1)</sup> をあげうるほどである。

しかし、村落、カーストに焦點をおいた諸研究においても、部分的には家族についての敘述、分析をしているものも多く、筆者の立場からみて必しも満足のいく敘述、分析ではないにしても、インド各地方の家族のあり方については、現在相當豊富な資料、分析を得ることができる。

筆者は、ここに約十年あまり、數回にわたつてヒンドゥ家族の調査の機會をもち、ケララ、グジャラート、西ベンガル諸州におけるデータを集めることができた。<sup>(2)</sup> 筆者がとくにヒンドゥ「家族」の構造を追求したのは、日本における「家」「同族」の構造とのコントラストに理論的興味を深くもつたからである。

日本の「家」の構造分析については、筆者は既に論文・著書に發表したところであるが、これらの研究において、<sup>(3)</sup>地方的差違が多少あるとはいえ、家の基本的構造においては、全國一貫した共通性が存することを論じたが、同様にヒンドウ「家族」の構造にも全インドのヒンドウ教徒に基本的な共通性が存在することが指摘できる。筆者の調査では、全インドの極めて限られた一部にすぎないのであるが、地理的にも非常に遠く、言語も異り、生活形態も異つてゐるグジャラートとベンガルの家族構造が基本的に同一であり、更にこれが、さきにあげた D. N. Madan によるカシミールの家族、また、他の研究者による中央インド、タミール地方などという異なる地域のものと同様にしていることが指摘できるのである。更に、ケララ州ナヤール・カーストなどは、母系制という他のヒンドウと全く異なる血縁組織をもつてゐるにも拘らず、その「家族」の概念に驚くべき共通性がみられるのである。

インドにおいては、文化的には、日本國內にみられる地域性などとは比較にならないほどの地方による差違があるにも拘らず、社會組織の根幹を形成する家族構造において、これほど強い共通性が存することは、カーストの存在によつて立證される所謂「パン・インディアン・シビリゼーション」というものの根強さがうかがわれるのである。

本論においては、とくに未發表のベンガルの大家族の資料（主として一九六五年八・九月の調査による）を中心として、所謂「ヒンドウ家族」といわれるものの實態と構造的特色を考察してみたいと思う。

詳しい資料にもとづいた論述（各論 1・2・3）をする前に、まず、ヒンドウ「家族」についての概念、形態、その構造、そして、とくに本論の中心となる「大家族」的集團のヒンドウ社會における位置づけについて、總括的な考察をして問題を整理しておきたいと思う。

註

- 1 T. N. Madan, *Family and Kinship: A Study of the Pandits of Rural Kashmir*, Bombay, Asia Publishing House, 1965
- 2 これら資料の多くは左記の論文・著書において紹介したところである。  
中根千枝、一九五八年、「ナヤール母系大家族制の崩壊について」『東洋文化研究所紀要』十四冊。同論文の英語版は一九六二(A) "The Nayar Family in a Disintegrating Matrilineal System", *International Journal of Comparative Sociology*, Vol. 3, No. 1.
- 中根千枝(福武直・大内力と共著)、一九六四年(A)『インド村落の社會經濟構造』アジア經濟研究所調査報告双書、第五一集、同書の英語版は *The Socio-Economic Structure of the Indian Village: Surveys of Villages in Gujarat and West Bengal* と同じくアジア經濟研究所より同年出版されてゐる。
- 3 中根千枝、一九六二年(B)「日本同族構造の分析——社會人類學的考察」『東洋文化研究所紀要』二八冊。  
中根千枝、一九六四年(B)『家』の構造分析」『石田英一郎教授還暦紀念論文集』所收。  
Chie Nakane, 1967, *Kinship and Economic Organization in Rural Japan*, London, Athlone Press (近く出版の豫定)

總 論

## 1 ヒンドゥ「家族」の概念

現實の生活における「家族」というものの概念は、社會によつて相當異なるものである。

たとえば、日本人にとつては、それは「家」(イエ)である。既に筆者が指摘した様に、「家」は居住・生活共同體的要素が非常に強いから、兄弟でも成長してそれぞれ妻子をもつて獨立の家に住むと、お互に「他家の者」となり、相手を第三者に「私の家族」とは紹介しないし、結婚前までは同じ家族(家)成員であつたが、も早や同一「家族」ではなくなつてゐる。「家」は、語原的にあきらかな様に、「へ」つまり「いろり」であり、同じ釜の飯を食べる仲間(家族成員を意味する)の單位である。この基本的な單位の概念設定は、インドでも同じであり、ベンガル語のエカナ・パリバル *Ekana paribar* (食事と共にする集團)<sup>(2)</sup>、カシミールおよび全ヒンドゥ語圏でつかわれるチュラ *Chulah* (いろりを意味する)<sup>(3)</sup> が生活共同體としての「家族」を意味する用語となつてゐる。

しかし、日本の「家」に象徴される「家族」の概念にくらべて、このヒンドゥの「家族」の概念は、擴大されやすい。云いかえれば、居住の枠をこえて容易に認識される。たとえば、インド人は次の様に云う、「私の〈家族〉はここに私と共に住んでいる妻子だけではない。隣の家に住む兄とその妻子、それからもう一つの家に住んでいる弟とその妻子、同じくその家に同居している私の両親、未亡人となつた姉を含めた、これこそが私の〈家族〉なのです」と。この彼らの云う「家族」の範圍は往々、従兄弟、叔父、甥などをはじめ遠い父系血縁者の家族にまで擴大されるのである。

この「家族」(family) という概念にはカシミールでは *Kotamb*<sup>(4)</sup>、グジャラートや中央インドでは *Kutumb*<sup>(5)</sup>、

ガルなどでは *Paribar* <sup>(6)</sup> という用語が使われている。これは同一村内における兄弟、いとこなどの様に近い父系血縁による男子を中心として形成される、いくつかの生活共同體の總和としての集團である。この集團は、ある場合には、それ自體一つの生活共同體を構成することもある（これが一般に大家族、ジョイント・ファミリーとよばれるものに相當したり、また日本の家のような小家族的な構成をもっている場合もあるわけである）が、多くの場合、臺所を別にしたいくつかの小家族よりなっている。従つて、インド人の「家族」の認識においては、家族成員の多寡、構成の如何、居住の如何という要素は殆んど問題となつていないのである。事實、彼らは「小家族」と「大家族」の區別、「居住家族という單位」と「いくつかの居住家族からなっている父系血縁につながる集團」の區別を、概念的にも、用語の上でも設定してはいないのである。

日本では「臺所を別にする」こと自體、「家を分ける」とか「分家する」といつて、家族單位の分離・獨立を意味するのであるが、インド人にとつては、「臺所を別にする」こと自體は必しも家族の社會學的分離を意味しないのである。このプロセスの理解の仕方は論理的にみて、どちらも一理あると云えよう。即ち、このプロセスにおける要素は、血縁と食生活(住居)という二つのものから構成されているわけで、日本の「家」の場合は、後者に重點がおかれ、インドの場合は前者に重點がおかれているといえる。ここに「家族」という用語によつてあらわされる概念の相違が端的にあらわれているのである。<sup>(7)</sup>

この様に「家族」という同一用語を用いながらその内容は社會によつて相違がみられるわけで、本論のはじめから筆者がを「「つけて「家族」と論じている理由がここにあるのである。本論でたんに家族と云う場合は、*Notes and Queries on Anthropology* に定義されている「親子関係ときようだい關係よりなる基本單位」をさす基本家族を

さすものとする。従つて、家族は、現實の實態を意味するのではなく分析概念として用いる。即ち、これは血縁の要素によつて構成される單位で、居住・經濟的要素を一應考慮しない分析概念である。現實の生活において、人々が「これが〈家族〉である」という意味の「家族」ではない。むしろ、この様に分析概念としての家族を設定することによつて、ローカルな〈家族〉の概念を明確に分析し、比較することができよう。日本人の場合は、居住に大きな比重がかけられた「家」であるし、ヒンドゥの場合は、近い父系血縁に比重をおいた「クトゥンプ」である。

## 2 ヒンドゥ「家族」の諸形態

インド人が「家族」というものを、この様に概念化していることは、その「家族」の實態、存在の仕方、世代の交替、結婚によつて招來される新たな條件への對應の仕方に密接な相關關係をもっている。ヒンドゥ「家族」の構造的特色は、兄弟の様に横につながる父系男子成員が、それぞれの妻子をもつて合同して「家族」を構成するという點にあらわれている。従つて、これをいま、最も單純な例——妻子をもつた兄弟二人——について説明すると次の様ないくつかの形態（バリエーション）がとられうる。<sup>(8)</sup>

A、兄弟がそれぞれ妻子と共に同じ家に居住し、同じ臺所の飯を食べる。こうした場合は殆んど例外なく、この單位は同一財産共有體の成員を構成している。

B、Aの場合と同じであるが、臺所を別にし、一應壁などの仕切りによつて、二家族がそれぞれ生活共同體として獨立している。しかし、同じ家（建物）に居住し、財産も共有にしている。この形態はインド農村に非常に

多い。

C、 A、あるいはBの形態をとりながら共有財産の他に、それぞれの家族が別途収入をもっている。

D、 二家族で財産が分割され、も早や二家族は財産共有體を構成していないが、同一建物を分割して住んでいるので、日常生活はあたかも一家族の如く密接な人間關係をもちつづけている。

E、 Dと異なる點は、二家族の住居が同一建物か、または隣接した地になく、同一村内ではあるが離れた地點に住んでいる。この場合も、Dと同様密接な關係が続くのが多いが、また喧嘩などしたために（兄弟間の財産の完全分割は不和に基くものが少くない）、敵對關係、あるいは疎遠になる場合もある。いずれにしても、日本の場合の様に兄の家、弟の家とか、本家とか分家といった序列意識が全くなく、兄弟の兩家とも徹底して同列にたっている。

また、この場合（Dの場合もふくめて）それぞれ財産を分割した家族（居住單位）が獨立した収入によつて生活を營んでいるのが普通であるが、ときには、一旦所有を分割した土地を共同經營し、その収入を折半するという場合もある。

F、 財産を分割してしまつた後に兄弟の一方が村外に居住する。この段階ではじめて兩家族を包含した「家族」という概念が生活感情の上でうすらぐかとも思われるが、日本の場合とは比較にならない程、兩者の關係は強い。村外居住家族は必ずといっていいほど、一年の大きな祭の季節には歸省し何日かを故郷の家で過すのが普通である。そして、この家は財産を分けた後でも共有になつていたり、そうでなければ、その一部は村外に出た者の所有となつているのが普通である。従つて、たとえ、親が存命しなくとも、また故郷にある者が自己



の従兄弟や甥の時代になつても、故郷に歸るといふことは、彼らにとつては「自分の家へ歸る」のである。日本の場合の様に、「兄の家」とか「本家」に行くといふことにならないのである。

AからFは、ヒンドウ家族の現實にみられる諸形態を示すものであるが、兄弟が現實生活において、また財産所有において次第に離れていくプロセスを示すものともいえよう。

日本の場合は、AからFにいたるプロセスもなく、Aの形態をとることさえ、例外的、臨時的處置であり、この形態になる以前、即ち、弟（正確には「家」を繼承する者以外の成員）の結婚を契期として、EあるいはFの形態（財産・居住家屋の分離）に直行するわけで、しかも形態はE・Fに似ていても、内容（實際の人間關係のあり方）は相當異つてゐる。日本の場合、一つの「家」からもう一つが派生するというプロセスをとるのに對して、インドの場合は、一つのものが二つに分解するというプロセスをとることなど注目すべき相違である。社會的經濟的操作としては、前者の處置の方が簡單である。

實際、一つの單位（居住・經濟・血縁・宗教といつたさまざまな要素からなる）の分裂、そして新しい複數の單位の設立といふことは、非常に複雑な問題であり、長期間を要するものである。日本の場合のように、兄弟（家督相續者以外）の結婚といふことが、直接「家族」の居住分離、財産の分割を伴うといふ處置はほとんどなく、居住の分離は、二人以上の兄弟が妻子をもつようになつて、しばらくたつてから起るのが普通である。これは血縁者でない妻たちが加わるによつて家族成員の構成が複雑化し、とくに妻たちの間の不和が原因となつて「臺所を別にする」といふ事態になりやすいのである。これは既に多くの研究者がヒンドウ家族について指摘したところでもある。しかし、前に記したように、この状態は必ずしも財産の分割に直結するとは限らないのである。兄弟間の財産分割は、とくに

父の存命中はひかえられ、父の死後なされる場合が壓倒的に多い。

均分相續（兄弟が父祖の財産に對して同等の權利をもつてゐる）といふことは、法的な規定としては明確なものであるが、現實への適用ということになると、その處置は非常に複雑な問題をはらむものである。まず徹底した兄弟均分による財産分割相續は現實問題として不可能に近いといえよう。實際、完全な財産分割をしたという場合でも、兄弟はそれぞれ自分の主張した（當然の權利として取得できると信じていた）分まで取得できなかった、というのが常である。そしてそこまでに到るプロセスも實に複雑な経過をとるものである。お互の主張による爭論、譲歩、攻撃、姉妹の夫たちや、母・妻の兄弟たち含めた相談、また彼らによる忠告、調停など。なかには裁判にもちこまれたりする。

このような事態を生む理由はさまざまあるが、その主要な問題は、分割を豫定された財産のあり方が複雑であること、分割をする兄弟間の條件がいろいろ異なつてゐることであろう。まず、こうした場合、財産としては、父祖から相續されたもの、個人の獲得したものにと大別できるが、個人所得を財産共有體のものとしてプールしてきた場合も少くなく、前者と後者の區別が判然としないことが多い。また財産分割にあつては、その財産共有體を構成している男子成人成員の個人財産、収入の格差が大きかつたり、それぞれが扶養しなければならない妻子の數、また父祖の家屋に住みつゞけている者、長期間遠隔の地に生活している者（彼らの送金などによる財産共有體への貢獻のあり方もまちまちである）との違いからくる條件の差などが當然分割のあり方に影響をもつてくる。このような均分による分割を多少左右する條件は數限りなく存在しうるものである。

このような複雑性をもつためと、彼らの強い血縁のセンチメントに支えられて、實際、完全な財産分割を短期間に

行うということは非常に稀である。また分割したといつても、相當な不分割の部分を残したまま、これが二〜三世代もつゞいて保持されることも少くない。(こうしたことが一層彼らの財産のあり方、それに對する權利のあり方を複雑なものにするということは言うまでもない。)また、後に詳述するナンディ一族、チャクロバティ一家の場合のうちに、積極的に一定の不分割の財産がきめられ、法的にその父系の子孫たちがそれをもちつゞけるという處置もとられうるのである。普通の農民の場合においても、耕地、屋敷、家屋、家畜、家畜小屋、果樹などさまざまな形の財産があるが、これらの一部を分割所有とし、他のものを不分割のまま据おく場合が非常に多いのである。従つて、日本の場合は、「分家」の設立といつた簡單明瞭な操作で兄弟の家族が財産體としても分離するわけであるが、ヒンドウ「家族」の場合は、A—Fのさまざまな形態が生れ、所謂「分離」にいたるプロセスは實に長いものとなる(ある場合は二世代も三世代もかかる)。現實に一定の時をきつてみると、B・C・Dの形態が壓倒的に多く存在しているのである。またD・E・Fの形態(財産分割)を一應とつても、父祖の財産の一部を分割しないで、いつまでも共有財産として残していることも多いのである。

Fの如く、兄弟の一方が村外に居住するという條件は必しも、兄弟を疎遠にするとは限らない。實際、次の如きFの變形も實に多いのである。

G、兄弟の一方(あるいは兩方)が村外に居住し、それぞれ遠隔の地で職業について全く獨立に生計をたてているが、故郷の村に土地・家屋などの共有財産をもちつづけている。

H、Gと同様な條件で、共有財産のあるなしにかかわらず、より収入の多い兄が弟を經濟的に相當援助しつづけている、など。

以上の諸形態の説明は兄弟二人という単純な設定であるが、同様な形態、プロセスが兄弟の数が多ければ、その分を含めて作用するわけで、兄弟（往々從兄弟などより遠い父系血縁者をも含めて）はつねに非常に複雑な經濟關係にたつてゐる。要するに、日本の場合に比べて、兄弟關係に經濟的關係が執拗についてまわるのであり、これは同時に兄弟關係によつて象徴される父系血縁關係のセンチメントの強さと相關關係にたつてゐるものである。

しかし、この父系血縁のセンチメントと經濟關係は、一定の限界をもつてゐる。父系血縁の認知というものは、この限界をはるかにこえるものであるが、それまでをも網羅する様な廣範な集團は、いくらインド人といえども、それを「家族」とは云わない。しかし、この限界は必ずしも明瞭でない。たとえばさきにあげた *Kutumb*, *Paribar* という用語は、實際に彼らの「家族」の概念より廣範な一定の父系血縁を軸とする家族集團にも使われているからである。これは世代がたつと、かつては「家族」として概念化されていた範圍が、うすらいでいつてしまつた結果にもよるわけである。「大家族」の分裂のプロセスをもつと追求していくと、經濟關係も全く切れ、親近性もなくなつて、なお残るのは宗教的な單位である。所謂、喪服制の軸となる一定の攢りをもつ父系集團の範疇が存在し、更にそれより大きく、族外婚の單位——多くのカーストにおいて *Gotra* とよばれる——が存在する。この *Gotra* のレベルになると、實際にその成員がお互に父系關係を充分設定できないほどの大きな——インド人にとつて最大の——父系血縁集團である。

この様にヒンドウ社會は、父系血縁を軸として、家族から *Gotra* にいたるまで、論理的な構成をもつてゐるが、いわゆる「家族」を構成する要素は父系血縁原理だけではなく、その他の經濟、居住、人間關係の親疎といったものが重要な要素となつてゐるのである。そして本論ではとくにこれらの要素の分析に焦點をあててゐるわけである。そ

して、これらの要素が比較社會學的に、ヒンドゥ社會においてはどの様に作用しているかということを考察したいのである。

そこで、前記の F・G・H などによつて代表される場合（家族）成員が遠隔の地に分れて居住している）など一つの注目すべき點である。この様な場合、他の社會であつたら、日本でいう「親類」に相當する概念におきかえられるのが普通であらう。これをインド人は敢えて「家族」とよんでいるのであるが、それは次の様なインド人の考え方、そして行動に支えられており、たしかにその實質は、私たちの「親類」關係とは異つていのである。

長期間居住地が遠く離れているということは、同じ村落に住んでいる場合より疎遠になりやすいのは、いずこの社會の人々でも同じであるが、インド人の父祖の地への執着度、兄弟間（より廣い父系成員をも含めて）の親密度は、日本人の場合などとは比較にならないほど強い。（これは共有財産存続の志向と相關關係にあることは云うまでもないが）。

この事實は、實態調査をする迄もなく、インド人に知人をもてば、例外なく感ぜられるものであるが、インド人の立場から、この志向を最も明確に述べているものとして、ベンガルの小説家、Nirad C. Chudhuri の傳記小説『知られざるインド人の傳記』<sup>(9)</sup>をあげたい。これにはインド人の「家族」family・「家」home と云うものに對する認識のあり方がよく述べられている。次にその一部を簡単に紹介してみよう。

彼の生れたのは、東ベンガルの Kishorganj という町で、この生家は辯護士であつた父が獨力で建てたものであり、彼はこの家で両親と兄弟と共に少年時代を過した。父の生家、すなわち彼にとつて父祖の家は Bangram という村にあり、この家には、ベンガル最大のお祭、ドルガ・プージャのお休みに毎年歸省し、十二日間を過す習慣であつた。この父祖の家には、父

の従兄弟、甥などからなる四家族が常住しており、彼の家族を合わせてこの五家族は co-shares (共有財産をもつ成員) を構成し、いわゆる「大家族」を形成していた。

しかし、実際には著者の家族は一年に殆んど一回しか訪れないのだし、彼にとつては、いどこよりも遠い關係にある父系成員の家族たちであるにも拘わらず、この Banagram の家は彼の家族にとつて驚くほど重要な意味をもつていた。すなわち、この家こそが、彼らにとつて「われわれの家族」の家 (home) なのである。(どこにお住い (live) ですか) とねられた場合は、必ず (Banagram) という答えを、(Kishirogani) と答えるのは (どこに御滞在 (lodge) ですか) という場合に限られていたという。

小家族で住んでいる彼の父の建てた Kishirogani の家 (彼はこれを "home" となく、たんなる "house" とよんでいる) は、どんなに現實の生活で重要な機能をもつていようと、それは彼らにとつて臨時の宿りの場所である、という感覚が強く、社會學的志向は常に Banagram の父祖の家 (そしてそこでの家族たちと共に構成される單位 (大家族)) に強くおかれているのである。

Chaudhuri の「生家」と「父祖の家」についての詳しい敘述に如何なくあらわれている様に、ヒンドウ社會においては、両親とその子供からなる小家族の居住單位というものは、あくまで、より大きい「大家族」的集團の斷片として認識され、自己の社會學的位置づけは、この「大家族」的集團をとおしてのみ、正當な位置づけをもつことができる。とくに上層においては、この様な集團に屬していることが對外的に重要な意味をもつている。従つて、居住單位を構成する小家族の獨立性 (とくに社會學的認知という點) が弱く、より廣範な「大家族」的な單位が、居住地の如何をこえて社會集團として強く機能していることが指摘できるのである。この結果「家族」の概念が必然的に日本人などの場合より擴大されているわけである。また、この様な志向こそ、既婚の兄弟を含む所謂「大家族」の形成と

存續の素地となつてゐるものである。

### 3 「大家族」的集團

こうした社會學的認識をもつヒンドゥにとつて、父系につながる男子を中心とする「大家族」形態というものは、當然その理想となるわけである。しかし、實際には、インド人と云えども私たちと同じ様な人間であり、共同生活ということは、相當個人の犠牲、讓歩を要求するものであり、傳統的倫理、道德に支えられてゐるとはいえ、決して容易なことではない。更に、この實行には相當な經濟的基盤を必要とするものであり、長期にわたる理想に近い「家族的」生活が實現されうるのは、どちらかといえば、上層に求められ、また、そのなかでも極めて少數である。とくに、家族成員がそれぞれ異なる収入をもつ近代生活にあつては一層減少する。しかし、典型的といつか古典的大家族は非常に少ないが、それに近い形は今でも相當みられる。

さきに分類したAからGにいたる諸形態が考えられるか、また現實には、一定の父系家族群は一形態にとどまるものでなく、いろいろな條件によつてその形態は變動していくものであるから、それぞれの形態に對應する用語の設定は分析上必しも意味があるとは云えない。本論ではインド人の「家族」という概念に従つて、便宜上、AからGのあらゆるバリエーションを考慮し、それらを一括して「大家族」的集團とよぶことにする。とくに本論で扱うのは、兄弟二人などという小集團ではなく、數人以上の既婚の兄弟・從兄弟よりなる家族群である。

現在インドにみられるこれら「大家族」的集團というものは、普通最も多いケースは、二―三〇年ないし五〇年位

の間に「大家族」的集團を形成しているものである。こうした「大家族」的集團をつぶさに研究してみると、「大家族」とは日本の「家」の様に連綿として續くものではなく、また、必しもそうした存續性を理想としているものではない。

現在インドにみられる多くの「大家族」的集團の歴史が立證している様に、その形成は、たまたま腕のある男子が經濟的に相當な成功をおさめることによつて、生家から妻子を伴つて獨立し（生家の家族員が少い場合には、とくに獨立することもない）、大きな邸宅を築き、少くとも數家族がゆうに生活できるだけの經濟的基礎を築くことによつてはじめられる。こうした體制のととのう頃には、彼の息子たちは成人し、妻を迎え、孫もできるわけで、息子が數人ある様な場合には、約三〇年位の間に「大家族」が出現するわけである。

しかし、息子が一人とか（二人以上あつても、生家にとどまる者が一人で、他は仕事の都合で遠隔な土地に住んでいた）、また男孫も少なければ、同じプロセスをとつても、またところ日本の從來の「家」と變らないわけである。従つて「大家族」の出現の可能性は、多數の家族成員を容しうる經濟的基礎（大きな邸宅と相當な収入源をもつ財産）と、息子、男孫の數、そして、これら家族成員が生家にとどまりうる場合にのみ、現實に形成されうるのである。

息子の數が多くても經濟的基礎がなければ、成員は常に散逸し、「大家族」的集團は實質的に形成され得ない。たまたま貧しい小さな家に、何人かの兄弟が彼らの妻子とともに寢食を共にしている、一見「大家族」的生活をしているケースがある。しかし、この様なケースは、他に住むべき家がないので、雨露をしのぐために、無理をしているのであり、それぞれの成人男子の収入は、わずかに自分自身、あるいは自分の妻子をその日その日養うのが精一杯で、共有財産といえる様なものは何らない——その住んでいる家でさえ堀立小屋の様なもの——といった場合が多い。こ



の様なケースでは、少しでも經濟的に生活に自信のついた成員は必ず獨力でここから袂を分つて自立していくのが常であり、これは平常な「大家族」形態というよりは、臨時的處置とみなすべきであろう。

さて、恵まれた條件に支えられて、一旦形成された「大家族」といえども、さまざまな理由で、分裂したり、散逸したり、子孫が絶えたりして、なくなりうるものである。即ち、一度形成された條件の存續が不可能になるという事態が當然考えられるのである。（日本でみられる様な「養子」「婿養子」の習慣のないことも考慮すべきである）

また、「大家族」というものは、子孫が増大したからといつて、その内部構造を變えずに、無限に膨張、擴大する性質のものではない。なかには、二〇〇人も成員を容するものもあるが、普通、三〇〇〜五〇〇人が限度で、その成人成員の父系血縁關係は三代位である。「大家族」の邸宅は、後に増築が行われたりして、人口増加に或る程度對處しえても、世代がたつにつれ收容能力の限界があり、また同時に共有財産の収入だけでは、全成員の生活を保障することとは困難になつてきたりする。この様な状態になるか、ならないうちに、大抵、その成員中に獨力で妻子と共に別居して、經濟的にも獨立生活をはじめめる者（たとえば前記の Chaudhuri の父の様に）がでてくる。ちやうど、かつて彼らの「大家族」の基礎を築いた父祖の様に。この様にして、また三代位たつと、彼の築いた基礎の上に、新しく「大家族」が出現したりする。

系譜的には、この新しい「大家族」はもとの「大家族」の斷片であるが、機能的には新しい「大家族」が強い單位として成長し、これに比べて、もとの「大家族」のレベルでは、それ自體機能集團として次第に弱體化してくる。この状態がすすみ、何らかの條件的契機をもつことによつて、ついには新しい「大家族」は古い「大家族」集團から獨立した存在になるう。

もちろん、このプロセスは、さきに述べたA——Gによつて代表される複雑な諸形態をとるわけで、父祖の家と縁がきれて新しい「家族」集團を構成する迄には相當の年月（幾世代にもわたる様な）がかかるのが常である。

一方、古い方の「大家族」の殘存成員のなかにも同様なプロセスで獨立していく者が出るであろうし、また財産分割、居住地の分散、「家族」成員の不和などによつて、集團として弱體化し、かつての「大家族」集團は長い間には、それ自體として消滅してしまうこともあるう。

この様に、「大家族」また「大家族」的集團というものは、一旦設立されたものが、そのままで末長く存続するといふよりは、擴大、分離、分散、分裂、消滅、新生、といつたさまざまなプロセスをへながら形成され、一定期間存続するもので、この點、日本の「家」の形成、存続とは非常に異つてゐる。日本の家制度が画一的なのに對しインドの「家族」制度の實態はこの大家族的集團の存在の仕方にもあらわれている様に、非常にバリエーションの大きいものであると云えよう。

#### 4 現實に存在する大家族的集團の意味

以上の如く、「大家族」といふものの構造、そしてそれを支える諸條件を考慮すると、近代化という様な大きな經濟的變動のなかつた時代にあつてさえ、一度形成された「大家族」の存続度というものは、それほど高いものではなかつた、ということ、そして全體の社會の人口において、「大家族」のケースの比率も決して大きいものではなかつた、ということが論理的に推定できるのである。

また、「大家族」的集團は近代化に伴つて簡單になくなるものでもない。もちろん近代化における諸現象（とくに近代の仕事に就きうる機會がふえることによつて個人収入の可能性が増加すること、それにともなつて妻子と共に近代的な新して生活を築きたいという欲望の増大）は、「大家族」の分裂へのプロセスのスピードを増し、當然「大家族」は少くなつたという常識的な大難把な見方はできようが、ここで注目すべきことは、この同じ現象が同時に、獨立した男子による新しい「大家族」の基礎を築きうる機會をも提供していることである。すなわち、近代化の過程は、一部に巨大な富の畜積をも可能にするものであり、このために新しい「大家族」的集團の出現を可能にしうるものである。

實際、近代化（植民地政策による新しい經濟活動を含めて）への經濟活動が活潑であつたベンガルなどには、とくに成功してその富を基盤として、新しい「大家族」集團の基礎を築いた者も少くないのである。後に詳しく述べる敏腕な一人の辯護士によつて、カルカッタの眞中に「大家族」が形成されたという様な例をみても、近代化に伴う職業の變化、都市への人口移動などという大きな波をのりこえてまで「大家族」が形成されうることとは、社會學的に非常に興味ある現象といわなければならない。

古典的「大家族」というのは、共有財産である土地の收入によつて、全成員が生活を共にするといふものであるが、こうした例は、すでにインドでは百五十年前から稀になつてきている。すなわち、こうした大土地所有者の層から、近代的インテリがでてきたのであり、當然彼らの家族成員の多くは、近代的職業につくことによつて個人収入をもちはじめてきていたからである。

この様な近代化に伴う經濟的變動は、當然「大家族」制をゆるがす作用をもち、實際にゆるぎはじめてきたのであ

るが、それにも拘らず、現代のインドにあつて、どの様にして、實際、こうした「大家族」的集團が存在しているかを、筆者の調査したベンガルの例を中心に考察していきたいと思う。

以下、本論において論ずる「大家族」的集團は、その成立において、いずれも農村にその發稍をみたものであるが、最初の「ナンディ一族」は都市近郊農村であり、次の「チャクロバティ一家」は、その主たる一家の生活の場が都會にあり、最後の「アミン一族」は都市から遠く離れた純農村におけるものである。<sup>(10)</sup>

いずれも、それぞれの出身地である農村の上層を形成する地主層で、村落全體に經濟的にも政治的にも大きな力をもつものであり、それぞれその村落において他の家々からぬきんでた大邸宅を構えている。インド農村における典型的大土地所有者である。實際には、彼らと村落の關係は重要なものであるが、それは本論の主題ではないので、ここでは論ぜず、もっぱら「大家族」的集團の内部に焦點をあて、比較を行い、所謂「ヒンドゥ」家族の構造の分析に役立てたいと思う。

この様な社會的經濟的大集團（ここで「大家族」的集團とよぶ）は、一つのインド村落に一つか二つ（あるいは、村落によつて全然存在しない様な）しかない様なものをつつて、ヒンドゥ「家族」を論ずるのは當を得ていない、という見方もあるかもしれない。しかし、現實のフィールドにおける量的統計、平均値というものは、それ自體必しもその社會の構造を知るのに有力な手ばかりではない。

一定の社會にある價值感、社會學的志向というものが現實のフィールドにおいて理想とする、あるいは理想に近い形をとるためには、さまざまな條件を必要とする。この條件が具備されなければ、現實の場において、理想の形——價值感、社會學的志向を物語る様な——をなさないのである。ヒンドゥ「家族」の形の實現には、何よりも裕福な經

濟を基礎にもつことが必須の條件であり、その條件に恵まれば恵まれる程、「大家族」的集團存立の第一の可能性が存在すると云わなければならない。このために、例外ともみえる数少ない例、そして本論に紹介する様な例が大きな意味をもつてくるのである。

「存在しない」とか「例外的にしかない」ということは、結論として提出する前に、「條件」の考慮が充分拂われなければならぬ。筆者は、インド農村の調査において、ここにあげる様な「大家族」的集團をもたない人口の「家族」のあり方をつぶさに調査し、また、他の研究のそうした「家族」の實態をとおして、ここにあげる様な「大家族」的集團が全ヒンドゥ社會にあつて量的には極めて少いパーセンテージしかためないものであるが、決して質的な、また構造的な例外ではない、ということを立てできると確信した上で、あえて、この特定の三集團をとりあげるものである。この様な「大家族」的集團は、インド人のもつ「家族」の概念を形成する諸要素を考察するためには、豊富なたたを提供するものである。くり返して云う様だが、本論はヒンドゥ村落の實態を研究するものではない。ヒンドゥ社會に内在する社會學的志向——とくに集團形成における血縁・經濟的要因について——を、「家族」に焦點をあてることによつて追求するものである。

#### 註

- 1 前掲、中根・一九六四年(B)、一〇一—一二頁。
- 2 前掲、中根・一九六四年(A)、二〇九頁参照。
- 3 前掲、Madan, 1965, p. 45.
- 4 Madan, 1965, pp. 27-8.

- 5 グジャラートについては中根・一九六四年(A)、一一六頁参照。中央インドについては Adrian C. Mayer, *Caste and Kinship in Central India*, 1960, p. 167 参照。
- 6 本文二七頁、ならびに中根・一九六四年(A)、二〇九頁参照。また母系制ナヤールにあつて、この「家族」に相當する用語は *Tarwad* (中根・一九五八年、三九頁 参照) である。
- 7 この點については、既に、中根・一九六四年(B)において詳しく論じたところである。
- 8 これらの實例については、中根・一九六四年(A)、九五—一二七—一二九—一三〇頁を参照されたい。
- 9 Nirad C. Chaudhuri, *The Autobiography of an Unknown Indian*, 1951, Macmillan & Co. London, (Jaico Impression: 1964).
- 10 ナンディ一族とヤクロバティ一家は一九六五年、八・九月、アミン一族は一九六三年、一二月に調査した資料による。

## 各 論

### 1 ナンディ一族

#### ——都市近郊農村の「大家族」的集團——

インド農村における人口の動態というものは、案外大きいものである。とくに、近代化にともなつて、村外に出る者が多い今日では、同一カーストの同じ父系集團に屬する者でも三・四代以前になると、お互いの血縁關係がはつきりしない場合が少なく、系圖を復元してみると、驚くほど多人數が村外に出てしまつてゐる。とくにこの現象は村落人口の上層において著るしく、このために當然「大家族」生活の行われているケースを見出すことは稀であるばかりでなく、四・五代前の祖父から派生した子孫たちによつて形成される「大家族」的集團が同一村内に機能の強い集團として存在する例もきわめて少い。

たまたまカルカッタ大學でベンガル文學を教授してゐる民俗學者の友人、A・パタチャリヤ博士が數百人にのぼる「大家族」のある村があるが、貴女の研究に面白いかも知れない、とジァムグラム Jangram 村のナンディ Nandi 一族を紹介してくれた。私は半信半疑でこの村を訪れ、調査をしたのであるが、その結果、非常に興味ある事實を觀

察することができ、ここに論述するようにヒンドゥ「大家族」についての考察を深めることができた。

### ナンディ一族の概況

ナンディ一族の村、ジラムラムは、西ベンガル州・フグリー地區 (Hooghly District) にありカルカタからグラント・トランク・ロード (カルカタ—デリーを結ぶ幹線道路) を西に約四三マイル、汽車の小驛のあるパントア (Pantua) から北に、田畠の中の牛馬用の道を約四マイル入った所にある。

ナンディ一族はこの村の全人口、約二五〇〇人の半数を占め、土地所有者として、所謂ドミナント・カーストを形成している。

ジラムラムの階層構成は、他のインド農村に比して單純であり、全村の人口は土地所有者層と耕作者層に大別され、その他の職業カーストは、床屋を除いては村内になく、隣村の諸カーストに依存している。土地所有者層には、ナンディの他、Ghosh, Dutta の二つの小グループが存在し、耕作者層は、*Advaseses* よばれる最下層、ないしはカースト構成の枠外とおかれてゐる Bagdi, Bauri, Mal, Mandal, Santal などによつて構成されている。

人口構成からみても、また社會・經濟的構成からみても、ジラムラム村はナンディ一族が中心を占め、また彼らによつて村が代表されている (村長もナンディ一族からでている) といつても過言ではない。この事實と後述する一族の歴史を反映する様に、衆落の家々の配置もナンディ一族の古い練瓦造、二階建の大邸宅を中心に形成されている。フグリー地方は英國の植民時代以來、とくに經濟活動が活潑であつた地方で、この邊りの大地主の多くは、同時に



廣範なネットワークをもつ商業に従事し、巨大な富を築いた者が多く、この地方の農村にはよく、こうした堂々たる大邸宅がある。これら大邸宅は、要塞とか、城、またはヨーロッパのシャトゥウの感じに近く、家族の住む邸宅というよりは、公共のビルディングといった感じの建物である。従つて、この邊の農村のたたずまいは、日本の農村などとは非常に違つた風景である。

この様なナンディ一族の住む大邸宅——Nandi Borburi と呼ばれる——の内部は、ちやうど都營アパートの様に一廊づつ家族に召據された數千の部屋部屋に分れている（圖版3 参照）。更にこの邸宅のまわりには、それから派生して次第にできたナンディ一族の住居がうす茶色のしつくい壁をめぐらして所せましとばかり密集してしてナンディ一族の居住區を形成している。この一群に接近して他の土地所有者カーストの家々があり、大きな池をへだてた東北隅に下層カーストの耕作者たちの堀立小屋の様な家々が群つてゐる。

こうした衆落は、椰子の木々がその周圍や池の端に植えられ、村のまわりは見はるかすほどの水田にとり圍まれており、隣村までは、三、四マイルあるのどかな農村風景である。ジャムグラムと他の農村を結ぶ牛車の道は、雨が降ると泥んこになり、ジープでも中々行けないほどで、いかにも田舎であるが、村には堂々たる大邸宅があり、澤山の人口がまるで都會のスラムの様に密集して住んでいる風景は、農村という日本の常識からみると異様である。

現在のジャムグラム村のナンディ一族の人口は約一二〇〇名で、一九六五年八月の世帯数は、一一五（このうち、一たん他村に嫁したナンディの女性が未亡人となつて子供を連れて歸村し世帯を形成しているものが三世帯あるので、ナンディ男子成員の世帯数は正確には一一二となる）。こうしてみると、一世帯約一〇名という平均になるが、短期間あるいは長期間仕事の都合で村外に出ている者（獨身で、また妻子と共に）が約半数近くいるため、實際の常住人

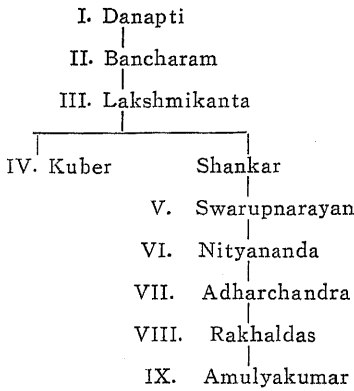
口は約半分ということになる。この人口總數と稱するものが現實とほぼ一致するのは、ベンガルの年最大のお祭、ドルガ・プージャの時期である。この時期には、村外に居住する者は、一ヶ月、また少くとも一週間は妻子を伴つて歸村する。この習慣はナンディ一族の場合だけでなく、ベンガル地方に今でも廣く行われている習慣である。

全體的にみて、出村、歸省の頻度など極めてまちまちで、(たとえば、土、日に歸省する者などずい分多い)、正確な常住人口數を把握することは實にむづかしい。調査者としてだけでなく、彼ら自身も、それをつかむことがむづかしい。このナンディ一族は、後に詳しく述べるが、一定の財産共有體を構成しており、その共有財産により、毎日、確實な村内現在人口に對して、米を配給している。面倒にも毎日配給するというのは、日によつて人口の動きが相當あるためである。さきにあげた一一五世帯というのは、一應この通帳に最少グループとしてまとめられているもの數である。しかし、この場合のみでなく既に筆者がグジャラートの農村の論述で指摘した様に(中根・一九六四年(A)、九七—九九頁参照)ヒンドゥ村落では、この世帯數というのみなかなかみにくいものである。普通、食事を共にしている家族が世帯として登録されるわけだが、後に述べる様に、彼らにとつては臺所を別にするということは、いつでもきわめて簡単に實行できることだし、世帯を別にしたから、完全に生計が別になつたとか、財産も別になつたとは限らないので、世帯を別にしても、登録變更をするほどの重要性はない。従つて、この米配給通帳の世帯數とというのも必しも現實の世帯の數と一致しているとは限らない。實際はいくぶんこれより多くなっている筈である。また後に述べる様に、一世帯の構成も、人數も相當なバリエーションがあるのである。

## その歴史

さてこのナンディ一族というのは、ナンディの名をもつ父系血縁につながる男子成員とその妻子より構成されている集團である。彼らはこの集團を *Bansa* (lineage 父系血縁集團) とよぶが、より普通には *paribar* すなわち「家族」を意味する用語でよんでいる。(この「家族」に對して、ナンディ一族以外の人たちを *biashhi* (外國人、よそ者という意味) とよんだりする。)

この巨大な「ナンディ一族」の父系系譜によると現在の生存者は、九、十、十一、十二世代に當る。たとえば、この一族の長老の一人、一九六五年、六七歳のアムリヤクマール (*Amulyakumar* 圖版7参照) からみた父系系譜は



次の様になる。

アムリヤクマールが九代目といつても、この「大家族」の基礎を築いたのは四代目のクベル・シャンカール兄弟であるから、實質的には六代目に當り、年代にすると、シャンカールがゾミンダーリ權を買いとつたのが一八六二年であるから、今から約百年前ということになる。

この百年間に四代目の二人の兄弟から現在の約一二〇〇人に増大したことになる。更にアムリヤクマールの云う所によると、今世紀

の初期には約二〇〇人位で、文字通り「大家族」共同生活をしていたという。従つて、ここ約五〇年間に人口は六と七倍に増大したことになる。このナンディ一族の全人口は、その系圖にも明らかな様に、父系の系統によつて、大きく二つの集團 (*dhara* = Section) —— 第四代の兄のクベールの子孫と弟シャンカールの子孫からなる —— に分れてゐる。兩方ともほぼバランスのとれた人口を構成し、アムリヤクマール老に従えば、彼の屬するシャンカール集團 (妻を含めて) は六五〇人とのことである。

この一族が現在までに、どの様な道を歩んできたかを次に簡単に記してみよう。

第一代の Danapati は西ベンガル州の 24 Parganas の Kawta 村の貧しい家に今から約二〇〇年前に生れた。若くして Shahagani 村に移り、更にフグリー地區の Mondali 村に來住し、ここで富を築くことに成功した。

その子、Bancharam の代にジャムグラム村のあたりにいた土匪を討伐して、このジャムグラム村に定住した。ナンディはベンガルの下層カースト (Scheduled Caste とよばれるカースト群の一つである) Namasudra にもともと屬するものであるが、彼らはこの土匪を退治した様に祖先は武力にすぐれた種族であるとの誇をもっている。

第三代の Laksmikanta に二人の息子、Kuber と Shankar があり、この二人がさきにもふれた様に、ナンディ一族繁榮の基礎を築いたのであつた。

第四代のシャンカールは、第二代の Bancharam のはじめた商賣をうけつぎ、發展させ、カルカタに事務所を設け、遂にはベッテル・ナットととうがらしのセイロン向の獨占代理店となることに成功した。一八六二年には、この地方のソミンダリーの權利を獲得し、大土地所有者として、また實業家としてすばらしい成功をおさめたのである。弟のシャンカールがこの様に富を築く一方、兄のグベールは宗教的にすぐれた人格によつて一族の精神的支柱とな

つていた。當時、たまたま聖者 Balakdasnohan がクベールに、女神 Lakshmi Janardon とよばれる偶像（圖版6にある様に、實際は單なる「石」である）をクベールに與えたことにより、以來この女神はナンディ一族の「家族神」となることになったのである。（現在も邸宅の中央にある祠に大切に安置され、毎日プラーミンによつて祈りが捧げられている。）

この頃、シャンカールによつて、現在みられる城の如き練瓦造りの二階建の大邸宅が建設された。この一見要塞の様に見える大邸宅には二百人を收容できる食堂、貴賓室、食糧を保管する大倉庫、數十の個室（小家族用の）などがあり、今世紀の初頃までの「大家族」生活華やかかりし頃がよくうかがわれる。またシャンカールは、早くも一八六五年に本村に小學校を設立している。

シャンカールは晩年、一八九九年に全所有地を女神に捧げ、トラステイ・エステイトにした。これによりナンディ「大家族」は不分割の財産共有體を永久に構成することになったのである。

この様に「大家族」の創始者、あるいは最もその繁榮に貢獻した者が、晩年、亡き後の財産の分割、分散を防ぐために、それまで築積された財産の大部分を「家族神」に捧げることによつて法的に不分割の處置をとることはインドでは珍らしくない。このために子孫はいつまでも「大家族」を存続せざるを得ない立場におかれる。たとえば、その成員は生活を共にしなくても。

ナンディ一族の場合、シャンカール亡き後も二、三十年は食事を共にする「大家族」生活は續行された様である。つまり、その家族成員の数が二百人を超加する頃（一九二〇年代頃）から、共同生活は次第に困難になつてきた様である。丁度、この頃から近代化にともなつて個々人が外に職をもち個人収入が増加すると共に、成員間の收入の格差

も顯著になりはじめた。また、急激に人口が増大しはじめたのも此の頃からである。

食事を別にする様になつた年がはつきりしないが、それはやはりこの前後に求められる。しかし、その過渡期的状態として、食事がまず別になつて、しばらくして、成員の冠婚葬祭及び教育の費用一切が共有財産からの収入によつてまかなわれることが廢止された模様である。

この「大家族」生活に決定的な打撃と與え、今日の様な（後述）ナンディ一族のあり方になつたのは、一九四七年のインド・パキスタン分離に伴う一連の大きな經濟變動によるナンディ一族の商賣の没落と、ソミンダリ制の廢止による土地收入の激減であつた。

もともとナンディの經濟活動は、土地所有よりも商業に重きがおかれていた（商業活動による利潤は土地收益の四倍であつたという）ため、ベンガルの政治、經濟機構の變革にともなつて、商業利潤は大幅になくなつたということは一族の經濟にとつて大きな打撃であつた。現在のナンディ一族の收入は、約二百エーカーの土地の收益と、カルカッタのビジネス中心街にある土地、建物の賃貸料が主なものとなつてゐる。

これらの共有財産の運営はマネジャー二人（シャンカールとクベールの子孫からそれぞれ一人づつ選ばれて終身に當る）と、五人の委員（クベール二人、シャンカール三人で、任期は三年交替、全ナンディ一族の選舉によつてきまる。ジャムGRAMに居住していない者は郵送による投票も可能）によつてなされている。

現在、ナンディ一族の共有財産は、成員の生活に直接關係するものとしては、日々の米の配給ぐらいである。前述した様に、日々現在人口（午後五時）に對して各人、一日、二五〇GRAMの割合で配給される。毎日午後五時に各世帯の代表者は袋をもつて、その日の頭數の分だけ、配給をうける、子供も大人も同量であるので、小さい子供の多い

家は、ずいぶんゆつたりとした量であるとのこと。その日五時に歸村することが明らかに判明しない者、村外居住者はその權利を放棄することになる。一方、登録された家に五時迄に到着し、その日宿泊するお客がある場合には、その分も配給される。大變現實的處理である。係は二人いて、一人が米を天坪ではかり、もう一人が登録された世帯毎に何人分渡したかを表に書きこんでいくのである。この配給米の一年分の必要量は、彼らの共有財産である水田六〇〇ビガ（二〇〇エーカー）の收穫では、六ヶ月しかなく、あとの六ヶ月分は、同じく共有財産である商業利潤によって購入する、と云う。

この他、共有財産の支出の主なものとしては、祭祀の費用があげられる。まずさきにふれた「家族神」を祝るブラーミン二人（二家族）の生活費（一族の土地のうち一定の水田（一六ビガ）を支給している）。毎日曜の施餓鬼（貧困者に食事を與える。ブラーミンがナンディ一族の寺の一隅にある大きな臺所で用意して、乞いに來た者に分け與えるこの施餓鬼は以前は毎日行つたという。）最大のお祭、ドルガ・プージャの共食（四日間連續して行われる）。これにはブラーミン・コックを十名やとつて、歸省している者を合わせナンディ一族の全成員の食事をまかなう。これはかつてナンディ一族が共食の「大家族」として生活した頃の習慣を象徵して、一族の繁榮を祈り、一族の共同生活を樂しむものである。食堂は二〇〇人用なので、何度かにわけて行われる。このお祭の時は自家發電をし、電燈のないこの村も、光々とした夜を迎えることになる。（長老の話によると、この時全員の必要とするランプとその油をととのえるより、自家發電の方が安くすむとのこと。）その他、共有の物品の購入、共有財産の管理、運営費などがある。

## その生活

ナンディ一族の人々は、自分たちを「ナンディ家族」(Nandi Paribar)とよぶものの、現實の生活單位は三〜六人からなる小家族が壓倒的に多く、その生計は前記の米の配給を除いては、成人男子成員の個人収入に依存している。彼らの職業の種類は、事務員、教師、中小企業家が大部分を占め、農地を多少もつている者もあるが、その収入に全面的に依存できる者は極めて少い。全體的にみて、彼らは現在のベンガルの中流に屬する所謂「バドラロック」(Badrak)肉體勞働に従事しない者、紳士」と自他ともに認める人々である。比較的教育の普及したベンガルには、この種の人々は相當厚い層を占めている。

前に記した様に、本村にはナンディ一族によつて、既に一八六五年に小學校が設立され、一九四七年には、中・高等學校も設置された。(この學校には、ナンディ一族以外の者も就學できる。)このために、ナンディ一族の教育水準は比較的高く、本村での教育だけで、下級事務員として生計をたてることは決してむづかしくない。中には、本村の高校を卒業した後、カルカタその他隣接地域の専門學校、大學に進學して、中級官吏、教師など知的な職業に就いている者も少くない。近頃では教育水準はますます上り、娘たちにも高校、大學にまで進學させている家庭も少くない。さきに記したアムリヤクマール老なども古典的な正確な英語を話すし、一族の財産のマネジャーをしている人たちがくらしいになると流暢な英語を話し、カルカタ在住の中流のベンガリ・インテリとそのパーソナリティも殆んどかわらない。



他のインド農村と同じ様にまだ電燈もない邊びな農村ではあるが、バンドア驛に近く、少し無理をすればカルカタにも通勤でき、實際、カルカタおよびその周辺の地區につとめるサラリーマンが非常に多い。通勤に往復四時間かかるのであるが、その位の犠牲を拂つても、カルカタの住宅難による高い住宅費を拂うよりは、一文も住居費がかからなく、物價も安い本村に居をかまえている方が、ずっと經濟的であるとのこと。これら現在のサラリーマンたちは後述する様に、みな、祖先傳來の、あるいは祖父の、父の建てた家の一廓に住んでいる。この意味では、本村はカルカタ近郊農村の一つの典型といえよう。近代化における近郊農村の變貌ということは、社會學者などのもつ常識的な興味であるが、本村が日本の近郊農村と質的に違ふのは、彼らは生れながらにして耕作農民ではなく、地主層であり、その殆んどが昔から農業に直接従事していなかつたために、基本的な生活體系自體に大して變化がないということである。

食生活の水準なども、カルカタの中流とかわらず、むしろそれ以上である。電燈がなかつたり、住居が練瓦や粘土でできていたり、家具が極めて素末なものしかないので、一見貧しくみえるが、食生活などは、日本人の中流の水準よりはるかに豊かである。もちろん、肉は食べないが、蛋白源としては、魚(村の池に養食され、相當大きいものがとれる)、ミルク、ヨーグルト、バター、からし油などがふんだんに使われ、豊富な野菜類、果物類を材料とし、さまざまな香料を使い、女たちはなかなかおいしい料理、お菓子、清涼飲料水などをつくる。女たちは昔から料理以外には大して仕事もないので、食事の準備には長時間を費し、家庭料理としては中國人やイタリア人の主婦たちに比較するおいしいものをつくるのである。

また興味あることは、大都會カルカタから適度に距離をおいた農村であつたために、新開地の餘波をうけること

もなく、また、通勤可能なために、居ながらにしてサラリーマンとしての生活に入ることができるため、村落自體の人口構成上、大きな變化をもたらさなかつたというのである。實は、この條件こそ、これほどの國家的スケールでの經濟的變動をこりむりながらも、「ナンディ・バリバール」が現在もなお存續しつづけることができる重要な要因になつてゐるのである。

ニューデリーとかボンベイの様に遠隔地に職をもつ者以外のナンディの父系男子成員の大部分は、村外に職をもちながらも、この生地に一生を過すわけで、小家族毎に生計をたててゐるとはいえ、生活を全く共にした「大家族」時代と殆んど變らない場所に生活しているということは、一族の近親感の持續性に非常に大きな力となつてゐる。

とくに、一族の本村における全居住者の半數以上が、例の大邸宅を分割して住んでゐる（平均一小家族一、二部屋の割合）のであるから、一小家族の獨立性というものは最低になつてしまふ。暑い土地だし、小家族の居住する特定の一廊の入口のドアなど開けばなしで、いつでも誰でも入れる様になつており、お互の往來の激しさは、到底日本人には想像もできないものである。

この一小家族というものは、必しも一人の男子とその妻子という形ではなく、既婚の兄弟二人、そして兩親とか、大きな世帯のものもあるし、年若い未亡人と親の亡くなつた（あるいは仕事の都合で村にいない）孫とか、いとこの子供だとか、さまざまな構成をもつてゐる。とにかく、この單位の指標は臺所である。臺所は多くの場合、住宅とは獨立して、一廊（三平方米位の）になつており、巨大な邸宅のあちこちに散在してゐる。臺所をつくるのは、小家族の生計を獨立した時であるから、まちまちで、その都度空いた所に造つたり、村外に出て不要になつた者のあとをもらつたりするのである。このために臺所は大體居住している場所から近い所にあるが、小家族と臺所の關係は全體

としてみると複雑怪奇な分布を示してる。

また、住居も、外に面している入口は一つでも、その中で再び分れ、二、三の小家族の住居となつていたりする。たとえば、一つの入口から入つて一階は兄弟夫婦、二階には弟夫婦が住んでいて、それぞれ中庭に別々の臺所をもつているという具合に。また多人数からなる小家族の場合には、入口が二つあつたりして二家族に別れている様に見えても、實際は一つの生活共同体であつたりする。また、昨日までは二部屋をもつ小家族であつたのが、今日からは、二つに別れ、その二部屋が二軒という意味になり、一方が、またどこかに新らしく臺所をつくるなどという様に。前に述べた如く、生活共同体の分裂は多くの場合、財産の分割をとまなわない(少くともそれから数年の後に分割に向う)のが普通なので、極めて簡単にできるためである。

この様なプロセスを経て、現實の小家族の單位が存在し、それぞれの居場所がその都度決定されるわけであるが、死亡、結婚、出村、歸村などによる人員の増減によつて、お互にやりくりがなされるので、またまた複雑な分布となり、必しもより近い父系血縁成員が一定の場所に集つていくということもない。

血縁關係が遠くても隣同士などというのは、妻たちや、子供たちがとくに親しくなりやすいし、一方、男たちは學校友だちの様に同年輩の者と親しくなりやすい。これが更に、兄弟、いとこ、叔父、祖父などという近親の關係と交錯して、なかなかこみ入つた人間關係ができていく。

### 一族のなかの「大家族」的集團

さて、以上、生活共同體の單位としての小家族のあり方、その形成を考察したのであるが、本節では、この最少單位と、一定の財産共有體としての「ナンディ一族」の間に存在する集團單位について論じたい。論理的には兩者の中間にあるレベルであるが、最も複雑な意味をもつ實態で、また、ヒンドゥ「家族」の構造の考察にとつて、最も重要な側面である。

この集團は、必ず父系につながる近親者によつて構成される。たとえば、既婚の兄弟・いとこ關係、云いかえれば、祖父を共通にするナンディの既婚の男子成員といった様に。従つて、一つの集團のなかには、さきにのべた生活共同體である小家族がいくつが存在するのが常である。その數はもちろん一定でなく、極端には、一生活共同體が一集團というのものもあるし、十以上の小家族（生活共同單位）が一つの集團を構成しているものもある。次の表は一九六五年八月のナンディ一族のその分布状態を示すものである。

一集團を構成する 小家族單位の數	ケースの數
20.....	1
12.....	1
11.....	1
9.....	2
8.....	1
7.....	1
6.....	1
5.....	1
4.....	1
3.....	2
2.....	3
1.....	12
合計	115.....27

前に世帯としてあげた生活共同體の單位としての小家族數一一五は、二七の集團に分れている。この集團の區別は、父系血縁集團である「ナンディ一族」を系統だつて細分するのに最も適した方法であつて、さきに述べた米配給通帳もこの區分によつて整理されている。

では、この様な集團はどの様に形成され、

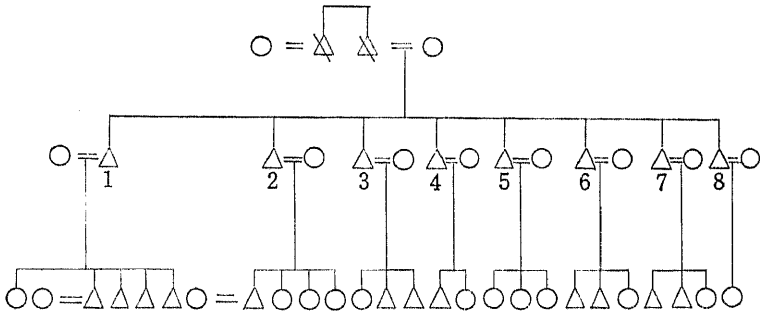
現實にどの様に存在するかを次に説明しよう。この集團はもちろん、前節で詳しく述べた大邸宅内に居住する人口にも存在するのであるが、説明をよりわかりやすくするために、ここには、大邸宅の外に居住する一集團をとりあげ、詳しく見ていきたいと思う。

前にも述べた様に、さしもの大邸宅も子孫の増加によつて、一九二〇年代頃から次第に人口過密になつてきた。そして、とくに經濟的に成功した男子は、このきゆうくつなアパート的生活をするより、自分でゆつたりとした一戸を構え、妻子と共に獨立して生活をするという方法をとる様になつた。こうした男子成員によつて、ここ五〇年ほどの間にこの大邸宅の東南には、多くの住宅ができ、全體的にみると、現在のナンディ一族の半數に近い者がこれらの住宅に住んでいる。しかし、こうした獨立の邸宅も一代、二代とたつうちに、またその子孫が増え、大邸宅におけると同じ様なプロセスをへて、數々の小家族が群居するという状態になる。そして、また、この家から出て、自力で新しい家を外に建てる者がでてくるという様に、同じプロセスがくりかえされるわけである。いずれにせよこうして新しく建てられる家は、少くとも三百坪位をもつものが多く、その屋敷には白い二米位の高さの土塀をめぐるし、他からはつきり自分たちを區別している。そして、五〇年もたつと、人口が増え、全員が生活を必しも共にしなくとも、他の成員から一應區別された一つの共同體的集團を形成する様になる。

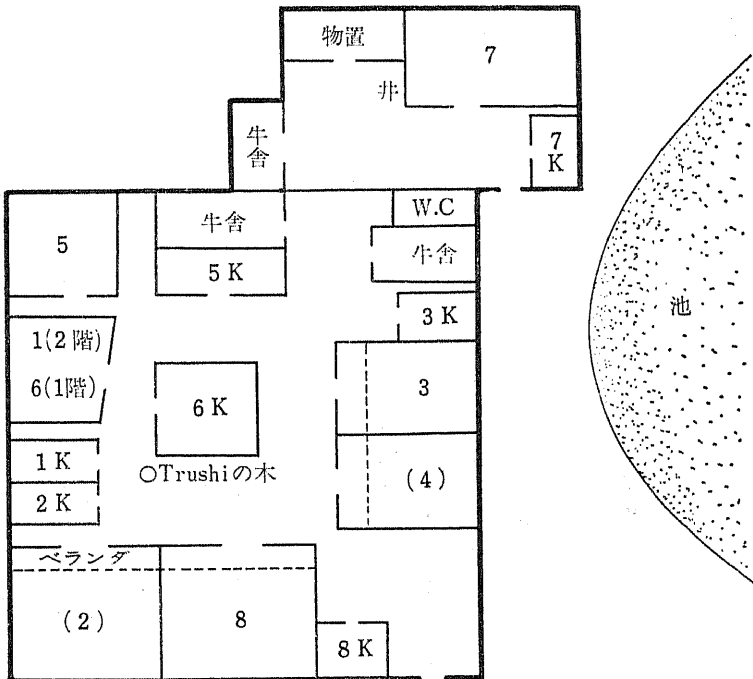
次に紹介するのは、現在の家長たちの亡父の時代に大邸宅から出て、獨立した家を構えた、Dinobandhu Nandiの兄弟たちによつて構成されるナンディ一族内における一つの「大家族」集團である。

彼らの亡父は、兄夫婦と共同でこの家を建て移り住んだものである。兄夫婦には子供がなかつたが、彼には合計八人の息子ができ、彼らが成長し、妻子をもつにおよんで、屋敷内に次第に建増しをし、更にこの一廓ではせまくなり、

第 1 圖



東洋文化研究所紀要 第四十三冊



三八

(上)Dinobandhu Nandi(2)の“家族”の系圖

(下)同家族の居住家屋分布圖

各小家族の占める一廊は 2~4 部屋 (各々疊ほどの大きさ) に 區切られている。Kは臺所。

晩年には、その南の土塀に隣接して、もう一戸を増設し、現在見られる様な状態が形成されたのである。(第1圖参照)

現在、八人の息子たちは全部妻子をもっており(次男 Dinobandhu Nandi は四五歳)、それぞれ臺所を別にした小家族を形成し、この屋敷内に特定の住居を與えられている。父は晩年はその妻とともに、七男の家族と共に、この一番新しい二階建の家(庭のスペースも廣い)に居住し、そこで亡くなつた。この未亡人は現在、八男の家族と共に住んでいる。

更に、年が経つに従つて、それぞれの息子たちの家族が増え、成長し、この屋敷もせまくなるにおよんで、最もやりての次男 Dinobandhu Nandi (彼自身四・八エーカーの水田と、一・六エーカーのジュート畠を所有し、脱穀工場を經營している)が、息子の結婚にもそなえて、一九五二年に新たに獨立の家(大きさは7の住んでいる一廊とほぼ同じ)を建て、妻子と共に移り住んだ。結婚した彼の長男は、この新しい屋敷の離れの家に妻と共に住んでいるが、食事は全員共にしている(圖版4を参照)。同様、脱穀工場を經營している四男は一九六一年、獨立の家(大きさは4と同じ位)を建て移り住んだ。兩者とも、父の家から歩いて二三分の距離にあり、子供たちも、いつも一緒に遊び、相互の往來も頻繁で、密接な關係をもちつづけている。

八人息子からなるこの集團は、父の畜積した財産(土地・家屋・脱穀工場)を基盤とし、部分的財産分割をへながら兄弟がそれぞれ發展させて今日に到つている。なかでも右記の様に、二男、四男は最も成功している。長男と三男は官吏で、前者は停年退職している。五・六・八男は共同で脱穀工場を經營し、共有の土地をもつていたが最近分割するにいたつた。七男は農業經營を専門としている。父の残した土地の一部は全體の共有財産として保持され、その

共有の土地からの収益は八人に等分に分配され、家屋については父の建てた邸宅には、現實の居住の如何をとわず、それぞれ、八分の一の權利をもっていることになっている。實際にも、獨立した次男も四男も、それぞれかつて彼らが住んでいた一廓は、彼らのものということになっている（第1圖（下）參照）。しかし、實際には次男の權利のある一廓(2)は、この家を建てた父の未亡人が住み、獨立した四男の(4)は倉庫に使つたりしている。同じ様に、長男の家族は、マガラ市で政府の仕事をしている彼らの長男と共にそこに住み、ここには常住しないが、いつ歸省してもいい様に、六男の住む建物の二階がそれに當てられている。

この様に、彼らの父の建てた家というのは彼らの共有財産で、分割してないので、息子たちは現實の居住と關係なく、論理的には八分の一の權利をもちつづけるわけである。同様、古い大邸宅にも、彼らは何分の一かの權利をもっているわけで、いつでも、それを主張しうるわけであるが、大體、餘裕のある者が餘裕のない者にゆづつていっているのが實態である。この様に、景氣がよく成功をおさめた者から自力で出て新しい自己の財産を形成し、それによつて生活し、共有財産は經濟的により弱き成員によつて使われるというのが、ヒンドゥー「大家族」の慣習である。

財産、家屋の共有は、もちろん「大家族」的志向を存続させるのに大いに役立ちうるのであるが、その最大單位である「ナンディ一族」というレベルに對して、その中で更に次のレベルである財産共有單位であるこの八人息子よりなる集團は、一層その成員間の緊密度を高めている。これはより直接的な財産共有體という經濟的基盤の他に、より近い血縁者からなるグループを構成していること、そして、一つの屋敷内に長い間生活してきたという親近性が大きく加つている。

血縁の親近性は男子成員の關係をより緊密にし、生活の場における親近性は、女性成員の關係を緊密にする。嫁た



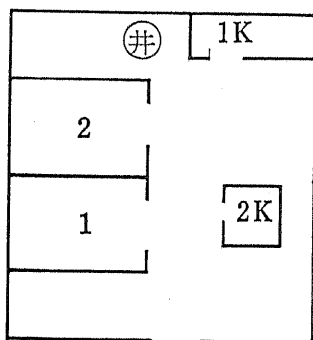
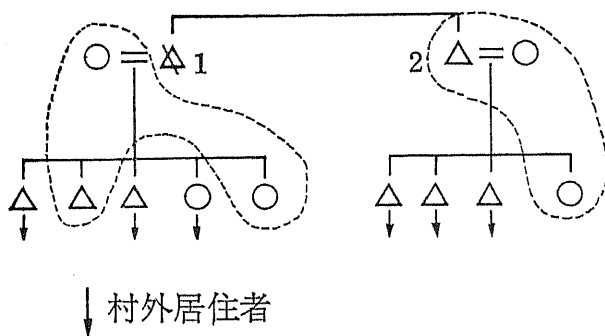
ちは強力な女の世界を形成し（臺所を別にしているため、不和の原因が非常に少くなっている）、家族間の結びつきを一層強めている。嫁の世界と男子成員（妻は夫の弟とは話ができて、夫の兄とは接觸をさけなければならない）をつなぐのは未婚の娘たちの重要な役割である。この集團において一番自由に振舞うことのできるのは未婚の娘たちである。娘の父系につながる男子、父、叔父、兄弟というものは、娘の結婚に對して、大きな發言權をもち、結婚してから、彼女のパトロンの存在になるために、この關係は親愛にみちたものである。未婚の娘は、この父系集團の男子成員、叔父さんやいとこ、そして既婚の兄弟に對しても何の遠慮もなくつき合うことができる。

實際インド村落の調査においては、その初期に、もうすぐ結婚してしまうという成人した娘と友人になると實に都合がよいのである。彼女の父の父系の成員は殆んど村落内にあり、そのすべてに喜んで（大抵の場合、彼女から進んで）紹介してくれる。彼女は彼らの家に行けば、どこでも歓迎されるし、その家の寢室から臺所にいたるまで、自由に出入りして案内してくれる。（日本のお嬢さんでは、とてもこんな偉力？はない）。

こうした娘たちと、嫁たちの關係は、日本の小姑と嫁との關係と少し違う。もちろん嫁は自分の夫の姉妹、姪に對して遠慮がある。しかし、夫とその姉妹、姪に對する親愛關係があまりにも公然として、明瞭に慣習としてうち出されているので（これは同時に彼女自身こうした愛情を父方の男性からうけていることになる）、それを嫉妬するというよりは、當然のこととして認容するという形をとる。また、この様に男子成員から親愛の情をかけられている娘たちは、殊更、嫁につくらく當ることもない。そしてもう一つの重要なことは、インドでは男の世界と女の世界がはつきりあるため、嫁、姑、娘という異なるステータスの女たちは、緊張關係はあるものの、女同志として日本社會には見られない一種の連帶感がある。それは日常生活における彼女らの遠慮のない、あけすけ接觸のあり方によくうかがわれ

るのである。この様な、妻たちや娘たちの役割は集團成員の緊密さに大きな貢獻をしている。以上、考察した八人息子の集團の場合は、堂々たる家族群を構成し、村の生活に相當な重みをもっている様に見えるが、ナンディー族のなかには、この様な親密度の高い多數の成員からなる特定集團をもっていない者もずいぶんある。

第 2 圖



Radha Raman Nandi (1の長男)の“家族”の構成員と居住家屋の分布

兄弟や息子の数が非常に少なかったり、また多くても、その大部分が仕事の関係で村外に常住している様な場合には、大きい親密な集團ができない。たとえば、(Radha Raman Nandi) の「家族」の場合(第2圖参照)は前記八人息子の集團とその形成の初期は非常に似ているが、現在の實際の集團の生活の雰圍氣は、ひどくひっそりしたものができるがっている。そして兄弟關係にある者が常住しない故か、この二家族は、それほど親密でない。しかし、この集團も、ドルガ・ブージャやお休みで、それぞれの息子たちが妻子を共に歸着すると、大變なにぎやかなものになる。以上の如く、ナンディの大邸宅の外では、三代位につながる父系集團が、それぞれ「コンパウンド・グループ」ともよぶべき親近性の強い集團を形成しているのがみられる。古典的な共食にもとづく「大家族」ではないが、その現代版として、こうした特殊な「家族」集團が形成されていることは興味深いことである。そして、ここに傳統的な「大家族」的志向をみることができるのである。

實際、現在のインドでは、Nandi Paribat の様なケースは例外に近いといえよう。しかし、量的な意味では例外かも知れないが、その形成の歴史、變容のプロセス、その存在の仕方は、決して例外ではなく、ヒンドウ「大家族」の實態をよく代表しているものと云えよう。量的に例外であるというのは、たまたま、その「家族」の基盤となつた經濟が非常に豊かであつたこと、不分割の共有財産をもちつづけていること、そして都市近郊に位置していたため、近代的職業につくようになつても、父祖の地である村落から必しも住居を移す必要がなかつたという地理的條件によるものである。

## 2 チャクロバティ一家

### ——都市における「大家族」的集團——

近代化による大きな經濟的變化にもかかわらず、都市近郊農村において「大家族」的志向が現在でも強くみられることは、前章のナンディ一族の分析によつて考察されたところであるが、本章においては、更に大都會カルカッタにおける「大家族」的集團の實態を考察してみたいと思う。

近代化、そしてそれに伴う都市生活は從來の傳統的社會制度、人間關係に大きな變容をもたらし、とくに、傳統的家族制度は崩壊して、小家族單位の社會生活に移行するものである、ということとは、もはや社會學の常識であろう。たしかに全體としては、そうした傾向がみられようが、この様な過渡期の現象というものは、社會によつて、相當異なるものであり、とくにインドなどにおいては、過渡期における傳統的「大家族」制の役割は、特定の條件のもとでは大きなものがある。それ故にこそ、他の社會（たとえば西歐や日本の社會）では理解できない様な現象——大都會においてさえ「大家族」が存在するという様な——がみられるのである。土着の傳統的慣習・制度というものは、近代化のプロセスにとつて、必しもネガティブな要素ばかりをもつてゐるものではない。

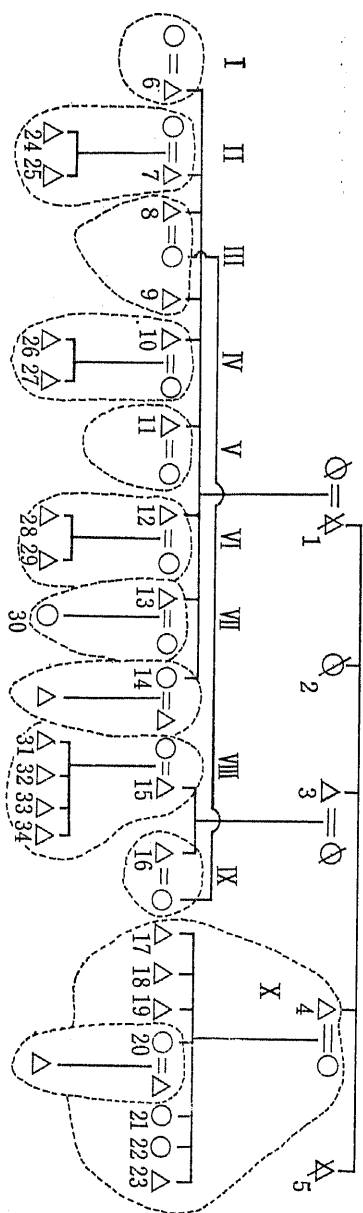
ここに詳しく述べるチャクロバティ「大家族」は、決してカルカッタにおける稀有の例ではなく、筆者の知る限りにおいても、この西ベンガルの大都會には、相當數のこうした例が存在するのである。また住宅事情に恵まれないために、この様な「大家族」生活をもたなくてもできない状態にあるものも少くない。また、一方、いろいろな事情

で——たとえば兄弟關係（その妻たちの關係も）がうまくいかなかつたり、兄弟が仕事の關係で遠隔の地に離ればなれになつて住いを構えなければならなかつたりして——小家族に分裂して、それぞれが強い獨立性をもつてしまう例も無數にある。もちろん、この後者の例が全インド的にも壓倒的に多いのであるが、西ベンガルでは、カルカッタの如き就職の可能性が非常に高い大都會があるので、新しく都會に職をもつた者が生地（故郷）の農村と密接な關係をもちつづけることが可能であること——ジャムグラムの如き近郊農村でなくとも、大てい一日か二日あれば往復できる——と、兄弟がみなそれぞれ職をカルカッタおよびその周邊にもつ機會に恵まれているため、他の地方より近代化が進んでいるにも拘らず、却つて「大家族」的生活を可能にする條件により恵れているということも云えるのである。

ここに紹介するチャクロバティ一家は、このベンガルにおける都市「大家族」の代表的なものと云えよう。彼らは、最高カースト・ブラーミンに屬し、後に詳しく述べるが、辯護士、大學教授などの職業に従事し、經濟的には必しも富裕（インド上流の水準）とはいえないが、社會的に健全な上層を占める代表的カルカッタのベンガル紳士層に屬する人々である。

チャクロバティ「家族」は、第3圖にみられる様に、その創始者から現在まで三世代にわたる合計三四人の父系成員（うち三名死亡）とその妻たちによつて構成されている。「チャクロバティ家族」の名によつてよばれる現在の生存人数は正確には、そのうち婚出した娘（14・20）二人を除いて、生存している十人の妻が加わるから三九名となる。そして、この三九名は、一〇の小家族と一人（3）の長（*Karia* とよばれる。權威的な家長というよりは、*organizer* という意味が強い）から構成されている。その内容はグループ毎に示すと、次の如くである（第3圖參照）。

第 3 圖



Chakrovati 一家の系圖

点線によるかこみは各小家族単位を示す。

創始者<sup>(1)</sup>の息子たち

家族人数

I 長男(6) 中小企業主

二名

II 次男(7) 辯護士

四名

III 三男(8) 共有財産管理者

三名

四男(9) (病弱で無職、三男の家族とともに生活している)

IV 五男(10) 中小企業主

四名

V 六男(11) 醫者

二名

VI 七男(12) 大學教授

四名

VII 八男(13) 音楽家 (コンダクター)

三名

(合計二二名)

創始者の弟・現在の家長(3)と、その息子たち

VIII 長男(15) 鐵道職員

六名

IX 次男(16) 大學職員

二名

(合計 九名)

X 創始者の弟(4) 辯護士

八名

(總計三九名)

以上の如く、現在(一九六五年九月)このチャクロバティ一家の總人口は三九名である。この全員を一堂に集めて

寫眞にとることは不可能であつたが、ちやうど一九五七年二月三日に撮つた全員の寫眞（圖版8）があるのでこれを参照されたい。

この寫眞は、一家の事實上の創立者（1）がベナーレスに去る直前に撮られたものである。ヒンドゥ教徒の間では、功なり名とげた者が、老年に到つて、この世ですべきことはすべて済ませた、そしてあとは子孫にすべてをまかすことにきめた、という満足した境地に達すると、俗界を離れて餘生を一大ヒンドゥ教の聖地ベナーレスで神につかえることによつて過し、死に到つて、ベナーレスのガンジス河畔で火葬にふされ、悠久のガンジスの流れに歸す、ということを理想とする慣習がある。この様な理想的生涯をおくることのできる人は極めて少数であるが、この一家の創始者であり、家長であつたチャクロバティ氏は自らそれを實行できた幸運な人であつた。（ベナーレスに滞在すること約五年でその生涯を終つている。）従つて、この寫眞は、彼（當時七四歳）と家族たちとの別離の記念である。

この寫眞と現在の生存「家族」成員を比べると、その相違は（1）が亡くなつており、（29）はまだ生れておらず、（13）はまだ結婚していないので、その妻および娘（30）はここにはいない。この時點でも既に（2）（5）は死亡している。この寫眞には嚴密に云つてチャクロバティ「家族」でない（14）の夫（後列右から七人目）および息子（前列右から五人目、（20）の息子（二列目右から二人目））が加わつてゐる。またコック（後列右から二人目）および遠縁にあたる手傳をしてゐた婦人（後から二列目、右端）も入つてゐる。

このチャクロバティ全家族は後に詳しく述べる様に財産共有體を構成してゐる。一九六五年現在、彼らは全部で、七つの居住家屋に分散してゐる。この七つの居住家屋の形成自體この「大家族」の存在のあり方、歴史を物語るものであるから、次にそのプロセスを少し詳しく述べてみたいと思う。



## 故郷の家

彼らの故郷は、カルカタから三〇マイルほど南方、Diamond Harbor（商業中心地）に近いアクタラ（Akara）村である。堂々たる二階建の邸宅（部屋数は十畳位のもの約十二三ある）があり、この家の屋上の祠に彼らの家族神 Rai Raeswar（ナンディの場合と同様「石」の偶像である）が祀られてある。

この邸宅はアクタラ村の居住地の西北隅に位しているが、その前面には大きな貯水池があり、その周囲の椰子園の木蔭を通して、廣大な水田が擴つてゐるのが眺められる。この約二〇〇ビガの水田がこのチャクロバティ一家の所有に屬するものである。この土地は約半分が不分割の共有財産として、彼らの家族神の所有となつており、その他は父系男子成員にそれぞれ均分（兄弟間）して所有權がきまつてゐる。

これによつて、成員のなかでも個人収入のない者（9の如き）や少いものは、他の成員の収入にとくに依存しなくても、やつていける様になつてゐる。個人に所有權が配分されてゐる分は、法的には處分しうるものであるが、この一家の土地は、（1）の時代以來、誰も賣却していない。これらの土地の管理は一括して、この邸宅に常住する創始者の三男（8）によつて管理・運営されてゐる。實際の耕作は、この村の下層カーストである耕作者を定期的にやつて當らせてゐる。この村には、チャクロバティ一家の様に上層カーストの土地所有者の家は他に二家あるが、大多數は貧農の耕作者カーストよりなつてゐる。また、これら下層カーストの者たちは、都會に常住する彼らの家の召使の供給源でもある。

共有の土地から收穫される米は、毎年全家族成員に配當され、都會に常住する者もその主食の大部分はこれによつてまかなわれている。また個人所有の分はそれぞれの希望に應じて賣却され、その収入はそれぞれの用途に従つて使われる。

このアクタラの邸宅には、土地を管理する三男(8)夫妻と四男(9)が常住している。四男は病弱なので、五十歳になる今日も獨身で職をもたず、この家にあつて祭祀を擔當し、僧侶的生活を送っている。従つて、平常は、この四男と三男、そして彼の妻と三人だけがひつそりとこの家には住んでいるが、ドルガ・プージャには、全員がこの家に集り、にぎやかになる。「家族神」の祀られている故郷の家というのは、この意味で彼らにとつて最も重要な意味をもつている。土地も家屋も決して常住者のものではなく、全父系男子成員が權利を分擔しているのであつて、日本の様に、都會に住む分家した弟たちが、兄の相續した故郷の家に泊りにいくといった感覺とは大變違ふ。兄の家に歸るのではなく、自分たちの家に歸るのであり、ここに故郷の家というものが、全「家族」成員にとつて、日本の場合とは比較にならないほど、兄弟、從兄弟、叔父、甥の關係を緊密に存續させるのに役立っているのである。

### カルカッタの大邸宅

現在、チャクロバティ「大家族」の *Karta* および過半数の成員が居住している *Raja Dinendra St.* にある四階建の家は、辯護士、ならびに實業家として成功した彼らの父(さきに紹介した創始者)が一九三七年に建てたものである。カルカッタ市内の西北部、ベンガリー居住地區の中心にある。當時は郊外に近かつたこの邊は、現在では都心の

一部を形成するほど交通の往來のはげしい街中である。このコンクリート四階建の家（圖版5を参照）は、前面の二〇米ほどの廣い道路と、そこから奥に入る四米ほどのせまい道の角に建っており、直接二方が道路に面した、邸宅というよりは、アパート建築的な家である。この邊一帶こうした建築がぎつしりと立並び、その中には、アパート式に「大家族」を構成しない幾つかの小家族單位に居住されているものも多い。このチャクロパティの家も、一部を他人に貸したりしている。

この家には、かつてはXの家族を除く全成員が居住していたのであるが、現在の常住成員は、3とVI、VII、VIII、Xの家族たちである。これらの成員による部屋の分布は、第4圖に示す如くである。

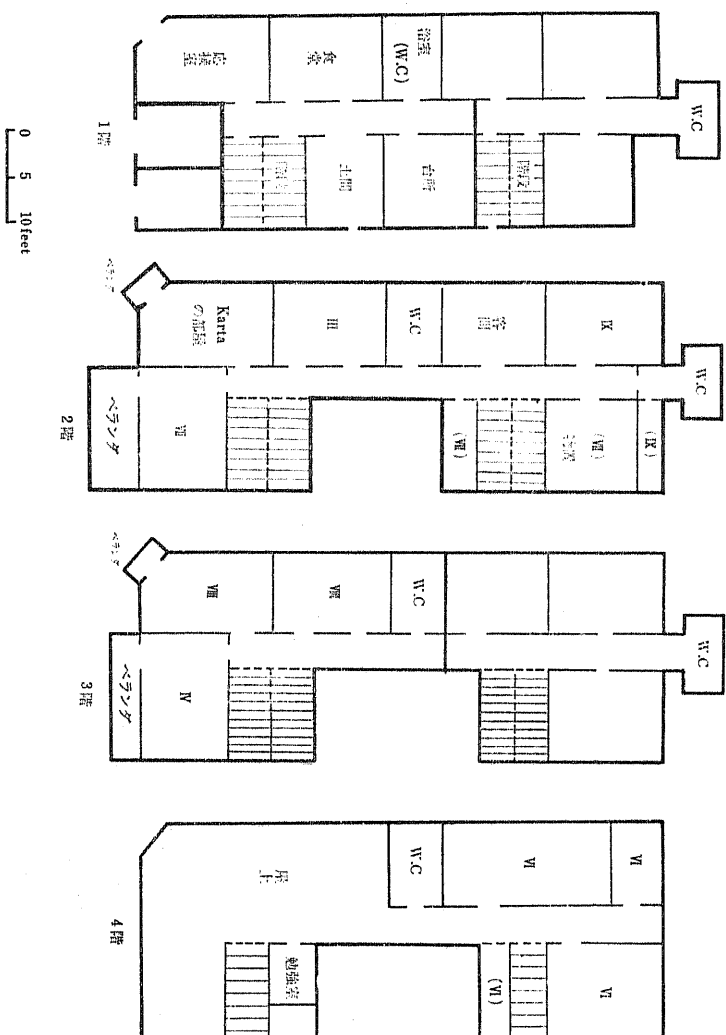
一階には約その半分に近い面積を店舗、住宅に賃貸し、残りは、應接室（入口玄關につづく部屋）、食堂、臺所、水浴室（便所をかねる）となつてゐる。

二階は、家長の部屋（<sup>カルダ</sup>應接室の上のベランダのある部屋、ここが一家の中心となつてゐる）。VII、Xの各家族の部屋と納戸、客間、IIIの部屋（IIIはアクタラに常住するが、管理人の常として、カルカッタに用事が多く、また年老いた（3）に代つて一族の中心的役割をもつてゐるので、夫妻ともよくこの家に宿泊するので、ここにも専用の部屋をもつてゐる。

三階、後部の三部屋を知人に貸してゐる。VIIIは子供が多いので、この階の二部屋を割りあてられてゐる。なおつい最近、新築の家をもち別居したVの家族の部屋がそのままになつてゐる。

四階は、父の晩年、屋上に増築された部分で、屋上の約半分に建てられてゐる。この階は大學教授（12）のVの家族の専用となつてゐる。また、これら離れた一隅に獨立した小屋の様な部屋があり、こゝは、大學受験をする者の勉

#### 第 4 圖



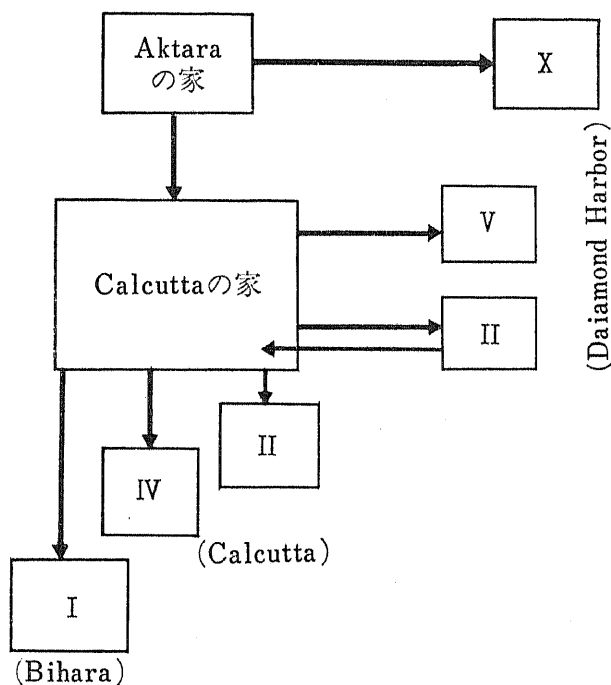
強部屋ということになっており、現在（15）の長男が使用している。

この家は、チャクロバティ一家の成員の多くがカルカッタに仕事をもつ様になつたことと、子女の教育のためカルカッタに在住することが必須になつたため建てられたものである。實際その家族の殆んどが（女性成員も含めて）大學教育を受けている。このカルカッタの家と田舎のアクタラの家がチャクロバティ「家族」の中心であるが、アクタラが宗教的な機能をもつのに對して、このカルカッタの家は、成員の實際の活動における中心であり、ここに常住しない者も、用事があるなしにかかわらず頻繁に訪ねてくる。

#### ダイヤモンド・ハーヴァの三軒と カルカッタの他の二軒

カルカッタのほか、チャクロバティ一族の活動の場は、彼らの村、アクタラから約二キロ東方にある港町、ダイヤモンド・ハーヴァである。故郷に近い関係もあつて、この町には、彼らの中で早くから獨立の家をもつ者がいた。そして現在も三家族がそれぞれ獨立した家をもつて在住しているⅡとⅩは、それぞれここで辯護士を開業しており、Ⅴは少し町からはずれた所に居を構えて、醫業ならびに養鶏を営んでいる。Ⅱ（7）は息子二人の教育のため（現在二人ともカルカッタ大學に學んでいる）、妻と息子をカルカッタの家に住ませ、自分は土・日にカルカッタに歸るのを常としている。つい二ヶ月ほど前、彼らはこのカルカッタの家にほど近い場所に立派な家を新築し、大家族の生活から別居した。Ⅹは他の成員から最も早く獨立し、カルカッタの家には住んだことなく、全成員のなかで一番社會的に離れているグループである。

第 5 圖



中小企業主である(6)(I)は、一九五〇年に位置的にもスペースの上でもより仕事のしやすい、カルカッタ近郊の町、ビハラに獨立の居を構えた。同様、一九六三年に、中小企業主である(10)(N)が、「大家族」の家から二キロほど離れた獨立の家をもつて別居した。以上のプロセスを圖に示すと第5圖の様になる。

仕事の關係で「大家族」はこの様に居住を分散させてきたのであるが、同時にこれは、家族成員の出生、成長、結婚によつて増加した人口壓を打解してきたのである。とくにI、II(後の場合)、Nの獨立居住のプロセスはそれを反映している。即ち、全生活共同體成員のうちでも、特に經濟的に裕福な小家族が獨立の居を構えて出ていつている。これはナンディー一族のプロセスと全く軌を一にしているのである。従つて、父の建てたカルカッタの家に居住をつづける成員は、相對的に收入の低い男子成員とその妻子たちである。住宅事情が東京

にまさるともおとらない現在のカルカッタのサラリーマンにとつて、この「大家族」の住みつづけることのできることは大變助かるわけである。實際、ここに住んでいるのは、現在俸給生活者である男子成員の家族ばかりとなつてゐるのも注目される。

### 共食「大家族」生活

このカルカッタの家は、創設當時以來、食事を共にする「大家族」生活を行つてきたのであり、今日でも、この常住の四大家族、一六人は食事を共にする「大家族」生活を續行させている。ナンディ一族のなかでも、これほど大きく、また既婚の兄弟のみでなく、既婚の従兄弟をも含む共食生活はみられなかつた。この意味で、このチャクロバテイの家は、珍らしく成功していると云えよう。その理由は次に述べる彼らの日常生活のあり方からもうかがうことができる。

「大家族」生活というものの、もちろん、収入・消費が完全に一つにプールされる古典的な「大家族」生活ではない。また、それ故にこそ、現代のカルカッタ生活のなかで、この存續が可能である理由がある。この實態はむしろ、四大家族協力生活とも云うべきものである。即ち、各々の小家族の生活は基本的に、その父の俸給に依存している。そして食費および共通経費として、各々家族の頭數に従つて、大人一人五〇ルピーづつを分擔供出するのである。しかし、これも能力以上の負擔となる場合は情狀酌量されるというから、やはり、より惠れた収入の者がより惠まれなものをカヴァーすることになる。例えば、(15)(Ⅷ)は成長さかりの息子(大學から中學の)四人をもつており、收

入は(12)(Ⅵ)などに比してすつと少い。しかし、その妻は、この大家族成員のなかで、料理が一番うまく、また大變好きで、實質的には大家族の食事を殆んど擔當しているから、勞働提供という面で大いに貢獻している。そのため、たとえその分擔金が少し比例的に少くともカヴァされうるものとみえる。

この大家族は以前から非常に腕のいいブラーミン・コック(圖版8参照)をもつていたが、彼はⅡが獨立すると共に、Ⅱの家のコックとして移つた。その代りに、このコックの近親者の少年をやとつており、コックへの支拂いはすつと少くなつたわけである。また手傳いとして、アクタラ村から少女三人を共通の召使として使用している。

食事の用意は、(15)の妻だけでなく、他の妻たちも手傳うのが立前であるが、(16)の妻は最近すつと病弱で働くことが出來ず、(13)の妻は新婚で(この大家族に入つて二年にしかならない)、手のはなせない一歳の幼女もあり、他の妻たちよりすつと年も若く、相方からの遠慮もあるらしく、大家族成員のためにあまり働かなくてよいことになつてゐる。(日本ではちよつと見られない様な若い嫁への思いやりが他の妻にみられ、これなども大家族生活の可能性に貢獻していると思われる。)従つて、この大家族の家事(その殆んどが食事の支度である。掃除は召使やスィーパーが入るし、洗濯物は洗濯屋に出すし、縫い仕事もない)は殆んど(12)と(15)の妻を中心になされてゐる。しかし、(8)の妻が滞在している場合には、彼女がすべて指導權をもつのが常である。彼女は一家のマネジャーの妻であるので(そして、彼らの故郷の家をきりもりしているという意味もあつて)全チャクロバティ一家の女性の中心となつてゐる。(6)の妻はもう長く別居してゐるし、(7)の妻は珍らしくグジャラート・ブラーミンの出身で、ベンガリーでないということもあつて遠慮がある。このために自然(8)の妻が指導權をもつのであるが、更に、彼女の妹が、(16)の妻となつてゐるために、その勢力は、他の妻たちに格段とぬきんでゐるようである。一族の者が集



つた場合などにも、(6)、(7)の妻たちでさえ彼女に一應ゆつつている。

彼女のリーダーシップのあり方は非常に興味あるものである。彼女は自分自身本當によく働く。そして、テキパキと他の妻たちに役割を與えて協力させていく。他の妻たちがお喋りに夢中になつて、何か失敗などした場合には、とてもうまい冗談を云つて大聲で叫りとはして、みな(叫られた者も含めて)を笑わせる。彼女を中心とした女たちのお臺所の楽しさは最高である。みな彼女の言うことは一應きくが、云いたい放題のことをお互に云つて、笑い聲がたえない。

日本では、昔から兄弟の妻たちが何人も共同生活をするという習慣がないので比較できないが、嫁姑關係、また、たまたま一族が一家に集つた様な場合のことを念頭において考えてみると、姑や兄嫁が働いている場合には、若い妻はその仕事が不得手であつても、また彼女の勞働を必ずしも必要としない場合でも、甲斐々々しく手傳わなければ非難を受けることは受合ひである。年長の妻たちを手傳うばかりでなく、彼女らよりも働かなければならない。若い方の嫁がより働くのは當然であり、また年長の女たちは、ともすれば若い嫁をいびりたがるのが常ではなからうか。そして、それが顯在的であらうと、潜在的であらうと、年長・年少の妻たちの關係は、常に緊張と遠慮が伴う。双方とも個人としては大變よい人でも、こうした關係に立つた時は、想像できない様な對人關係を見せるのが日本の女性の弱點であらう。少くとも許し合つた仲、冗談を云い合う仲にはなかなかなりにくい。

ところが、このチャクロバティの妻たちの關係は、上下關係というよりも友人關係であり、たまには喧嘩、冷戦もあるかもしれないが(私はついにそれを目撃する機會に恵まれなかつた)、お互に日本的な遠慮とか恐縮といったものが殆んどなく、あけすけである。これはインド人、とくにおしやべりで開放的なベンガリーの素質もあらうが、次

の様な理由にも求められよう。

二人とか三人とか少数では却つて緊張關係を招きやすいが、この様に少くとも四、五人となると、常に第三者的立場に立つことのできる者があつて、關係に彈力性をもつことができる、ということが、こうした開放的な氣分の人間關係をつくり出すことに貢獻していると考えられる。

もう一つは、カースト内婚であるため、妻たちが、みなインテリ・ブラーミンの家族からきているという、社會的、經濟的背景の同質性が指摘できる。内婚カーストというのは、非常に密度の高い文化的共通性をもつもので、日本社會における、いわゆる同じ様なよい家からきている、などという共通性などには比較にならないほどの同質性があるのである。それが特に最高カーストの場合は強いと云えよう。私はこの人たちと共に一堂で食事をしながら、彼女らの少しも飾らない大らかな態度から、それぞれが、さすがに文化の高いベンガル最高カーストの豊かなインテリの家庭に育つた人たちであることを肌を感じたことである。傳統的に床の上にあぐらをかいて座り、手で食事をし、にぎやかにおしゃべりをしながら食べるのであるが、どの婦人もいかにも落着いた品のよさ、豊かなベンガル文化のよさをそこはかとなくにおわしているのが實に印象的であつた。この様な生れとか育ちの共通性はたしかに集團構成に貢獻するものである。少くとも冗談とは、こうした密度の高い共通性から生れるものである。

しかし、この妻たちがみな同じ様な大家族の家に育つた者とは限らない。例えば、(12)の妻など、彼女の父には兄弟がなく、彼女自身としては第一人しかなく、どの社會にもある様な小家族の家に生れ育つたのであつた。實際、彼女はここに嫁入りした當時はこの大家族生活は實にショックで、なれる迄には大變であつたという。しかし、今ではすっかりこのこの大家族集團にとけこんで、大いに發言權をもち楽しくやつ事いる。育つた家がたまたま小家族であ

つたとしても、同様な小家族に育つた日本女性と比べて違うのは、彼女が大家族志向をもつヒンドゥ文化の中に育っていることである。現實に小家族であること、また一定の社會のなかに小家族、大家族がそれぞれパーセント（インドでも大家族のパーセンテージは大變低い）ということは、それ自體、その社會の文化的志向を反映しているものではない。現實に大家族のパーセンテージが非常に低いとしても、その社會の文化がそれを志向している場合、大きな意味をもっている。小家族といえども、條件的に大家族を構成しえなかつたものと見るべきで、その生活信條、生活形態においても、必しもインドの小家族を他の社會（たとえば日本）の小家族と同一視することはできないのである。

### 「大家族」のなかにおける小家族

以上の如く、「食生活を共にする」ということは、同じ家に居住する全員の結合に重要な作用をもち、また妻たちはその食事の用意をとおして緊密な關係をお互にもつことができる。しかし、前にも述べた様に、それぞれの小家族は父を中心として、彼の収入に依存した明確な單位として存在している。

實際、この小家族は、この家のなかにあつて、前に簡単に説明した如く專屬の部屋をもち、小家族としての自分たちの世界をもっている。原則として、夫婦單位で一室づつ寢室兼居間が配當されている。その各部屋には、ダブル・ベット、簞子一棹、整理簞子一個、テーブルと椅子二〜三脚、全く同じ大きさ、質をもつた以上の家具が一セットがついており、公平な配分がなされている。

子供が成長するにおよんで、子供用にもう一室與えられる。例えば、Ⅶが三階の隣合つた部屋二室をもっている様

に。しかし、この部屋割といえども、食費擔當分に多少の融通がつけられていた様に、必しも原則を貫くというのではなく、個人の要求はある程度考慮され滿され、多少のやりくりが可能であることは云う迄もない。

例えば、Ⅳは他の成員同様、かつては二階に一室をもっていたが、研究生活にはどうしても静かな部屋が必要であり、大學關係の訪問客も多いという理由で、父の生存中に、特別に彼（妻子とともに）のために屋上に二部屋建増しされ、人口調密な他の階から獨立して快的な一隅を占據している。ここには大家族の上記の共通の家具の他、彼自身によつて、書棚、冷蔵庫、大きな接待用のテーブル、客用のベット一臺、などあり、中々モダンな小家族用の生活の場をつくつてゐる。

各家族は、寢室兼居間の他に、必要に應じて物置の部屋、ないしお茶をわかす小部屋をもっている。ここに各小家族専用のおき、この小さいコンロでは、三度の食事以外のお茶とか、幼い子供の食事をつくつたり、歸宅のおそくなつた夫の食事をあたためたり、夜食とか、特別に早く出かける場合、簡単な朝食をつくつたりする。

この大家族生活の實態というものを、日本の、あるいは西歐の社會に生活している人たちに理解させることはなかなかむづかしい。建物の狀態から云へば、一つの家というよりも、一つのアパートと云つた感じであるが、全成員が食事を共にするという點で、むしろ小家族單位の寄宿舎といった感じである。しかし、妻たちを除く成員はすべて父系につながる血縁者で、出生以來、この家で毎日生活しているし、妻たちは前述の様に食事の用意をとおして毎日密接につながっているから、當然各小家族の部屋は寄宿舎の各部屋ほど實際の人間關係の上で獨立性をもっていない。この「大家族」の成員は、他の小家族の部屋に殆んどノックなしに自由に出入りをするのが常である。暑い土地なので、留守の時以外は殆んどドアを閉ざすことがない故もあつて、お互の往來が頻繁で、いつも大變にぎやかである。

これではとても落着いて試験勉強などできないのが當然で、さきにも記した様に、とくに長時間勉強を必要とする時は、屋上の孤立した勉強室を使う様になつてゐる。彼らは大學受験から大學時代を代る代るあの屋上の部屋で過してゐるのである。

男子成員は職場や學校に行つてゐる間は留守だし、妻たちは食事の準備その他に忙しく、小家族が各部屋でその成員だけの小世界をつくりうるのは、極端に云へば、夕食後と朝食前といったわずかな時間にすぎない。とくにカルカタ人士の夕食は午後九—十時という非常におそい時間なので、彼ら自身の夜の時間もまことにわづかである。その他の時間に、自分たちの部屋にゐるとしても、大抵誰かが遊びに來たり、話しに來たりして、中々完全な小家族だけの時間はもちにくい。またみんな小家族だけでひっそり過すよりも、みんなでぎやかに話すことの方を好む様でもある。

従つて、妻たちは夫よりも、夫の兄弟・従兄弟の妻たち、またその子供たちと接觸してゐる時間の方が壓倒的に多い。同様に、子供たちは、父親よりもむしろ叔母さんや従兄弟、またいとこたちと親密な關係にある。この様にして、小家族の成員は、その夫婦、親子、きようだい關係に交錯して、その枠の外に、それにおとらない親密な關係を他の小家族成員たちにもつてゐるのである。このために、小家族單位の獨立性とか、プライバシーといったものは最低にならざるを得ない。

物的には、このプライバシーは、鍵によつて最低限度保たれてゐる。さきにも記した様に、「大家族」の成員はどここの部屋にも自由に出入りし、またその部屋にある物品にも自由に手をふれることができる。一方童子のひき出しやトランクには全部鍵をかけてゐるのが常で、その部屋の住人である小家族の妻は二ダースほど鍵を常に身につけて

おり、ほんのちよつとしたものをとり出すにも鍵を使う。たとえば、例によつて數人の成員とともに、私がある部屋でお話していると、私に見せるアルバムをとり出すのも、鍵をあげて引き出しからとり出し、すぐそのあとで鍵をかけ、私たちがそれを見終ると、また鍵をあげてしまい、鍵をかけておく。サリーの入っているトランクも同様、サリーをとり出したり、しまうたびに鍵をかけるのである。日本人の感覚からすれば、こんなに親しい許し合う仲の家族員の目の前で、こうして鍵をはつきりかけたりすることは、大變人を疑つて失禮の様であるが、彼らの感覚としては、これは私の（あるいは私と夫と子供の）私有物であるという意味で、自由に他の家族員と共有に出来ないもの、という意味がある。

鍵は、愉みをする様な悪い考えをもつ人から自分のものを守るという意味ではなく、全員共通のものと、私有のものとの區別をつけるものという意味をもっている。私たちの感覚でいえば、自分の引き出しに自分のものをしまつておく、そして、その引き出しをしめておく、といった位の感覚で鍵を使っている。

この様に、インドの鍵の習慣は、泥棒にそなえてという對社會的な意味以外に、共同生活の必要上、面倒なことが起きるのをさけるという物理的な必要に由來していると思われる。とくにこの様な大家族でなくとも、一般に見られるインド人の家の中で、一見わずらわしい（私たちの感じでは）家のなかでの鍵の使用は、私ははじめ、多くの召使を使っている故だと簡単に考えていたが、全く忠實な召使の場合でも、また全然紛失の心配がない場合でも、この様に鍵を使用しているのを見るにおよんで、やはり昔から家族的共同生活をもつインド人の生活上の必要という意味で、鍵の重要な機能が存在するのだ、と考える様になつた。くり返す様であるが、それは、個人、あるいは小家族のものをそれ以外の人のものから區別するという意味があるのである。一般にもインド社會には、鍵がかけてない場

合には、他人のものを誰でも拜借してよいという考えがあるし、それが實行され、また何か偷まれた時は、悪いのはむしろ鍵をかけておかなかつたことである、と解釋されている。

鍵について、少し長く説明してしまつたが、日常生活における小家族のプライバシーとか獨立性が非常に少いことは同時に、「家族」全體の結合を高めるものであり、實際、この集團は小家族の總合というよりも、一つの「家族」という印象が強い。そして、實際に彼ら自身も、また彼らの知人たちも、その様な認識が強い。

例えば、たまたま(12)の妻の母(同じ地區に住んでいる)が遊びに來たことがあつた。彼女は、眞直に彼女の娘の部屋を訪れず、ちようと、その時滞在していた(8)の妻につかまり、(16)の妻の部屋に入り、お喋りをし、次に家長(3)の部屋に挨拶に行き、しばらく彼と話をし、また(16)の部屋に歸つた。その頃丁度(12)の妻がそこに現われ、つづいて、學校から歸つた(15)の息子たち、遊びに來た(10)の息子二人も一緒にゐて、お茶を飲みながらにぎやかなお喋りが始つたのである。彼女は自分の娘やその子供に會いに來たというより、この一家全部に會いに來たという感じである。實際、とうとう最後まで、みんなとそこで遊んで歸つて行つたのである。彼女は、これら成員すべてと大變親しく、冗談をさかんに云つて全く自分の家で振舞つてゐる様で、私など驚いてしまつたが、どうもこれが「大家族」との交際の仕方であるらしい。これほどこの「大家族」の成員というのは、わけへだてがなく、密度の高い集團を構成してゐるのである。

とにかく、誰かが、どこかの部屋に遊びに來ていると、この家の誰でも(特に子供たちなどは遠慮なく)そこに入つて來て、仲間に入つてお話をきいたり、發言するわけで、よほど特別の話があつて特定の個人を訪れる以外は、みんなの友だちになつてしまふのである。お互に邪魔にはなりはしないかなどという心配や遠慮は全然ないのである。

こうしてみんなでぎやかにお話をするということが何よりも楽しいものである。

このなかでも、(13)の妻だけは、まだこの集團に入つて新しい故か、子供が小さく世話がやけるために、自分の部屋からあまり出ない。それでも他の人たちは美しい彼女をよく訪れたりする。しかし、他の部屋ほど長居をしない。最後に私がこの家に訪れて、例によつてみんなでお話していると、あまりお話しなかつた彼女が、自分で造つたという美しい造花を私にプレゼントしてくれた。私とお喋りをしたり、私のためにお料理を作つたり、私の研究の手傳いが出来ず残念に思つて、彼女らの共通のお友達である私に何か自分の心を傳えたいという「家族」の一員としてのやさしい心使いだつた。

#### 全大家族成員の人間關係

前にも記した様に、この邸宅に常住する全家族成員が揃うのは、夕刻から夜にかけての時間、日曜、お休みの日である。この夫たちを加えた全成員の接觸のあり方はなかなか興味深いものがある。

もちろん、最年長の(3)は、Kariaとして全成員の中心、頂點に立つており、敬老精神によつて、全成員から尊敬、敬愛を受け、成員の行動をとおして、そうした地位にある彼への禮節がよく守られていることがわかる。この家に訪れるお客は必ず彼に挨拶をするし、全成員の生活のリズムは彼の朝晩の祈りによつてひきしめられていると云えよう。しかし Karia の翻譯である家長という用語は誤解を招きやすい。いわゆる日本の社會科學者たちがよく使う「家父長的」權威によつて全成員を統率する家長といった、おかすべからざる權力をもつた者ではない。彼らが Karia



を英語の organizer と譯す様に、他の成員からぬきんでた地位權力をもつ者というよりは、集團の中心となつて、全成員の活動を組織化する立場にある者である。

とくに、このチャクロバティ一家のカルタ（3）は、創設者（1）の死後、生存成員のなかでの最高年齢者という順番によりその地位についた者であり、七十歳に近い老齡で、一家の財産の管理・運営は上記の様に彼の甥（8）が受けもつていたので、そうした意味での實權ももつていない。しかし、日本の様に老齡になると隱居して、家長の地位を息子にゆづるという習慣もないので、彼は精神的、社會的な意味で家長（カルタ）として存在している。こうした意味で、實際に一家の管理、運営をつかさどる（8）も、その他經濟的に非常に成功をおさめた成員たちも、いつもカルタに對する禮節を守り、一家の秩序がよく守られている。この秩序は、まず男子成人成員を中心として構成されているものである。彼らの妻子や子供は、更に、その周邊に位置づけられている。

この様なカルタを頂點とする人間關係に對して、實際の生活の場における人間關係のパターンがある。前者をフォーマルな人間關係とすれば、後者はインフォーマルな關係ということが出来る。このインフォーマルな全員を結ぶ關係というのは、カルタを頂點とする男子成員の構成と、さきに述べた（8）の妻を中心とする妻たちの世界の構成を結ぶ重要な働きをするものである。このインフォーマルな組織の中心となつてゐるのは、創始者の七男（12）である。ナンディ一族のところで未婚の娘が、男子成員と妻たちを結ぶ重要な役割をもつてゐることを述べたが、この一家には、たまたまそうした娘がいない。そこで、それに相當する役割をもつてゐるのが、既婚の男子成員のうち、二番目に若い（12）である。

彼の役割は、この家の常住成員の中心というばかりでなく、むしろそれよりもずっと重要なのは、この家に常住し

ない成員を含めた全大家族の中心となつてゐることである。この家には殆んどひききりなしに、他の家に居住する成員が訪れ、彼らによつて有形、無形にこの家は支えられており、またこの家は彼らの中心となつてゐる。そうしたなかでの彼の役割は實に重要なものである。これら全「大家族」成員のなかで、とくに彼が中心となつてゐることは、いろいろな意味をもつてゐる。

彼は常住成員のなかでは、収入は一番多く、カルカッタ郊外にある大學の教授（副學長）という社會的プレステージの高い職についてゐること、また年齢も三八歳という活躍ざかりであり、兄弟（長兄五五歳・弟二八歳）・従兄弟との意志の疎通にも適した位置にあること、性格的にも世話好きであることなどの理由があるが、それよりもつと重要な理由がある。

それは、彼がこの「大家族」的集團を形成する既婚男子のうち最年少者の一人であるということである。これはヒンドウ「家族」における人間關係（とくに男女關係）の重要な規則に由來する最年少男子の特權的立場である。

即ち、妻は夫の兄たちをはじめ、夫より年長の男子家族成員、そしてそれにつながる年長の父系男子成員に對して距離をもたなければいけないことになつてゐるグジャラートの慣習などは、このルールを最もよくあらわし、妻たちは、こうした年長の男子成員に對して、話をするのができないばかりでなく、彼らの見える所では常にサリーの端で顔を敝わなくてはならない。ベンガルでは、それほど極端な行動規制はないが、こうした一定の男女間では殆んど直接話をしないし、常に相手方からの遠慮がみられる。ところが反對に、妻は自分の夫より若い夫の兄弟、従兄弟に對しては、何の遠慮もなく、一種のジョーキング・リレーションにたつてゐる。この關係は、日本人の常識ではちよつと考えられないほど親密で、アフエクシヨナイトである。従つて、一家のなかの年少の男子は、年長の男子成員の

妻たちと非常に親密な關係にたつことになる。八人もの既婚の兄弟からできている「大家族」にあつては、その長男と末弟では全家族成員とのつき合いのあり方は大變違ひ。反對に、長男の妻と末弟の妻では、同様な違ひがみられる。そこで、このチャクロバティ一家の場合では、既婚男子成員のうちでは、(13)が一番若い(二八歳)のであるが、つい二年前に結婚したばかりで、既婚男子成員の仲間入りをしてまだ期間が短い。結婚前の男子は、やはり既婚男子とは一應別のカテゴリーに入るから、いくら若いといつても、全成員の中心となることはできない。従つて、(13)は結婚してから期間も短く、やはり(12)を中心とした體制がつづいてゐる。このことは更に、(13)の妻がまだこの「大家族」によくなれていないのに反し、(12)の妻はもうすつかりなれ、妻たちのなかでも堂々たる存在であることに支えられてゐると云えよう。

全家族成員中、(12)が遠慮しなければならないのは、わずかに(13)の妻一人である。彼は實際、自由に他の小家族の部屋に出入し、年長の兄・從兄弟の妻たちから大變歡迎され、同時に年長の兄・從兄弟から可愛がられてゐる。インドの兄弟の關係で印象的なのは、年長の兄が實によく年下の弟を可愛がり、それを行動にあらわすことである。(日本では、方向がむしろ反對で、弟から兄へつくすとか依存するといふ形で、兄は弟を可愛がることよりも、弟に對して權威をもつという傾向がみられる。もちろん兩者には親愛の情はあろうが、行動には殆んどあらわさないし、妻子をもつと例外なくこの親愛度が低下するといつても過言ではなからう。インドでは、特別に不和になる原因がない限り、この親愛度は既婚後もすつと續いてゐる。)

こうしたインドの人間關係にあつて、(12)はこの「大家族」の男子成員、女性成員の愛情と關心を集的に受ける立場に位置してゐる。この彼の特權的立場(社會學的な)が前述した彼自身のパーソナリティ、社會的地位に一層

助長されて、彼にこの一家の中心的役割を演じさせていると云えよう。事實前に紹介した歴史的な全員の寫眞を撮る時、一家の全成員によびかけ、彼ら全員の都合を何とかやりくりさせて、集合させるといふ大變な世話役を一手に引き受けたのも彼であつた。彼らは、お互に往來を頻繁にしているものの、一日、全成員を一堂に集めるということは、ドルガ・ブージャのお休みでもない限り、全く大變なことなのである。この様に(12)は、いわば、この一家の幹事役も引受けているわけである。従つて、この「大家族」的集團における彼は、カルタ(3)、マネジャー(8)そして女性軍の統率者(8)の妻とならんでそれらにまさるともおとらない重要な役割をになつていると云えよう。

お休みの日など、外に居住する家族たちも訪れ、彼とその兄の妻たちたちを中心とした楽しいな團樂の姿がよく見られ、その場は應々にして、彼の兄(または従兄弟の)夫婦の部屋であることが多い。こうした場合、兄たちと、彼の妻および彼の弟の妻は、それぞれ少し控え目な位置に立つているのが常である。

そこで注目されることは、女性(妻たち)軍の中心的役割を演ずる(8)の妻と(12)が最も遠慮なく陽氣な發言をし、集まりの中心となることである。この情景こそが現實生活におけるチャクロバティ一家の機能集團のあり方であると云えよう。この二人の男女を通じてすべての成員が緊密につながり、男・女の二つの世界がここで集團として融合されていると云えよう。従つて、家長中心などという單純な組織ではないのである。家長という權威によつて統率される様な戦前の日本的「家」「大家族」(日本の社會科學者によつて設定される様な)のイメージとは大變異つた、ダイナミックな人間關係かここにみられるのである。

家長は冠婚葬祭などの儀式的な場合、また對外的に關係のある重要事項の場合には、云うまでもなく「家族」の代表者として、權威をもつた行動にでるし、前に記した様に家長に對する家族成員の禮節によつて、家長と頂點とする

フォーマルな秩序は保たれているものの、日常生活の實態においては、家長はどちらかと云えば、特別待遇とでもいつた特殊な立場におかれている。これは一家のマネジャーである(8)の立場にも通ずるものである。かつての日本の傳統的な「家」における様に、家長が家族成員の鎖細な問題にまで直接干渉したり、命令したりすることはない。

また、云うまでもなく、長男なるが故に特別な責任とか権限をもつということもない。たとえば、この一家全體に一番責任をもっており、發言權の強いのは、創始者の長男ではなく、三男の(8)であることに注目されたい。全體にみると、それぞれの能力、性向、條件にお互が適應しながら一家全體が機能していると云えよう。また、家族内のことは、分擔制(それぞれの立場によつて自然に調整される)、合議制によつて運營されている。家長との相談、意見を仰ぐのは、重要事項に限定されていること、そして、その場合でも、他の成員の意見を遠慮なく披瀝できるということも注目すべきことである。日本の昔の典型的な「家」に比して、驚くほど民主的であるし、個人の自由が存する。ここに「大家族」制維持の祕訣がある様に思われる。

しかし、こうしたダイナミックな構造をもち、合議制によつて民主的に事が運ばれるというシステムをもっているにも拘らず、共同生活を維持するということは容易なことではない。實際、「大家族」における妻たちの争、兄弟間の不和によつて醜い分裂が起るケースも決して少くない。このチャクロバティ一家の場合は、非常に成功しているケースであると云えよう。それにはいろいろ理由があるが、全員の性格がうまくお互に適合していること、とくに中心的役割を演ずる(8)の妻と(12)の明るく協調的なパーソナリティに負う所も多いと思われる。更に重要なことは、前に考察したように、個々の成員の一見不平等ともみえる共同生活體への貢獻度を全員が許容しているという心の大らかである。この様に大きな許容の心をもつことは果して日本の家族成員に可能であるかどうかは甚だ疑しい。

インド人が大家族に限らず、共同生活を日本人より實行しやすいのは、實に彼らの社會にこうした許容性の強い人々が非常に多いということが指摘できる様な氣がする。

### 生活を共にしない「家族」成員との關係

別居によつても「家族」成員がなかなか疎遠とならない、ということは、ヒンドゥ「家族」の特色として、總論に述べたところが、この點についてチャクロバティ一家の場合を考察してみたい。前節に既に指摘した様に、別居した家族たちは、頻繁にこの家を訪れ、食事を共にすることが多い。一方、この家族たちも、ここから獨立した小家族の家をよく訪れる。

その際の相方の反應をみると、まるで毎日を共に過している人たちという親愛の情にみちている。彼らにとつては、別居という物理的な分離による社會的、心理的影響は非常に少く、ただ便宜的に別の所で生活しているという意識である。ちようど日本でいえば、息子や娘が故郷の家を離れて、學校のある土地に下宿生活をしている、といった感じである。日本人の場合は、結婚して獨立の一家を構えたと、この單位の獨立性が非常に強く、結婚前にその成員がともに住んでいた家族たちに對して、社會的、心理的分離の傾向が次第に形成され、かつての自分の「家」成員は、現在の自分の家族にとつて、よそ（他家）の人たち、即ち、「家族」でなく、「親類」の一つになる。従つて、日本社會では、結婚による別居ということは、社會學的に大きな意味をもつが、インド人にとつては、そうではないことが指摘できる。とくにこれは兄弟姉妹關係において顯著にみられる關係である。

このために、「大家族」から小家族が獨立した居住單位を構成する時期、條件というものは一定しておらず、また兩者（獨立する方も、殘存する方も）にとつて熟考を要する様な大きな問題とはならない。實際、「大家族」の成員の一定の小家族が獨立するときには、年長の成員の祝福のことば（これをベンガリー語で *Archie* という）を受けて極めてスムーズに圓滿に新居に移るのである。家長の許可とか、家族成員の同意などを受けなければならない、といった固苦しい問題では決してないのである。また新居に移る方は、自己の經濟力によつてその様な行動に出るのであり、「大家族」にとつて何らの經濟的負擔をかけないばかりか、日常生活における彼（およびその妻子をふくめて）の「大家族」生活か得られる經濟的權利を放棄するわけであるから、殘存成員に對して或る意味では餘裕を與えることになる。

「大家族」生活から新居に移轉した成員の云うところによると、はじめの頃は淋しくてたまらず、毎日の様に「大家族」の家を訪れ、泊つたりしたという。つい最近別居したⅡの場合も、とくに二人の息子は小人数の生活になれて新居に落つくようになる迄は二、三ヶ月かかったという。實際大家族生活になれていると、新居は廣々と生活できるものの、小家族生活というものは淋しくて味氣ない感じをまぬかれない様である。生活の雰囲気も質も「大家族」と小家族では大變違ふ。「大家族」生活はなかなか面倒な問題があつたり、にぎやかで落着かない様であるが、常に氣分轉換ができること、第三者的立場に立つ者がいつもいて、話が面白くできること、同じ經費でも食卓が豊かで質がずつとよいことなどの得點があげられよう。（たしかに、インドでは、こうした大家族の食事ほどおいしいものはない。私にとつて、このチャクロパティ「大家族」の家の食事は、北京やパリーのすぐれた料理に比敵するほどのおいしさで、いつまでも忘れられないものである。）

「大家族」生活の魅力もさるものながら、近親への情愛が、別居してから十年たつても、二十年たつても變らないのは驚ろくべきことである。しかし、この親密さの度合は、世代が代つたり、非常に別居の期間が長いことなどによつて影響される。このチャクロバティ一家の全成員中、X（4）とその息子たち）のグループは、他の小家族グループの間の親密さに比すと、少し疎遠である。長い期間の別居と、血縁的にも一グループを形成し、「大家族」の實質的主導權が、現在では創始者（1）の息子たちにあるために、彼らと（4）は世代的にも異つてゐるためと思われる。系圖の上では、Xと同一の立場にある（3）を父とするⅧ、Ⅹを含むグループは、共食「大家族」を創始者の息子たちと共に構成していること、その長が自分たちの父であること、更に、（16）の妻が（8）の妻の妹であること、という三つの大きな條件をもつてゐるため、Xのグループに比して、Ⅰ—Ⅶのグループにずつと接近した立場にある。

Xの例は、とにかく、こうした「大家族」的集團が、そのセグメントごとに將來分離の方向に進むというプロセスの一つを示してゐると云えよう。

同じチャクロバティ一家にみられるこの親疎のあり方は、次の様な例によつてもよく理解できる。筆者をこの「大家族」に紹介してくれたのは（12）（ナンディ一族を紹介してくれたバタチャリヤ博士の弟子である）であるが、彼は筆者の依頼をまつ迄もなく、それぞれの別居している家に私を連れていつてくれたのであるが、Xの家には、その同じ町にあるⅤの家に行きながら、時間がないとか、忘れたという理由で訪問しないでしつた。ところがそれからカルカッタに歸る途中、すつかり暮れてしまつたにも拘らず、Ⅰの家には、わざわざ筆者を案内したほどであつた。

このⅠの家への訪問は大變印象的であつた。（12）の長兄（Ⅰの（6））は夕やみのなかを突然訪れた私たち（12）をはじめ同行の彼の妻、妹（14））を見つけると、にこやかに満面に親愛の情をこめて迎えに玄關に出て來た。玄關の近



くにはライラックの様な白い香の高い花が咲き亂れていた。(6)は「子供がない我々夫婦はこの花の美をめめて暮している、ここに嬉しい客を迎えるとは」という意味の即興詩的な美しい文句にその喜びを托して私たちを招き入れてくれるのだった。それにつづくおさなりでない、きょうだいの會合に羨しいほどのヒンドウ「家族」のよさが感じられた。(こんな場合「やあ、よく來たね、その後みんな元氣かね」などという日本版とは、どうみても質的に違ふのだ。)

兄弟の間のこの一生變わらない親密さは、彼らの姉妹に對しても一生を通じて惜しみなく注がれている。(12)は私をアクタラの家に案内する時、早速妹(14)とその息子を嬉しそうにさそうのだった。父系制であるから、彼女の夫、その子供は理論的には、この「大家族」の成員ではないが、「われわれ家族」といつた場合、いつでも嫁に行つた娘、姉妹が入つてゐる。たとえば、寫眞(圖版8)にこの一家から嫁に出た(14)(およびその夫)、(20)(およびその息子)が入つてゐるのを注目されたい。

この關係は全く注目すべきものがある。とくに姉妹の子供にとつては、母の兄弟は *mama* とよばれ、近親のなかでも最も重要な人となつて、常に非常に親しい關係にたつてゐる。*mama* はいつも何かプレゼントしてくれるし、いざ結婚などという重大な事には一番強い發言權をもつてゐる。この様にして、兄弟・姉妹關係は、母方の伯父・甥(姪)という關係にまで強く機能し、兄弟關係にまさるともおとらないものをもつてゐる。また前者は後者と質的に違ふ。兄弟關係は財産分割という様な密接な利害關係にたつてゐるが、兄弟・姉妹關係には、それがなく、このことが一層打算のない親近性をもたせ強い機能をもちうるのである。

實際、インドの男性の妻と姉妹に對する愛情、思いやりはどちらの方により強いかわからない。とくに、兄の妹に

對する情愛は大變なものである。この様な三人が一緒にいる場合（たとえば「14」の如く、既に結婚して居住を共にしていない妹が兄夫婦の家に訪れた——實際ほんとに彼女らはよく兄の家に遊びにいくし、兄たちは彼女を訪れる——といった様なとき）を観察すると、どのケースも私が知る限り、どうも妹の方が強く、妻の方が遠慮がちである。日本では全然これが反對である。結婚前には姉妹が嫁入した兄の妻に對して小姑として自由に振舞つても、一旦結婚してその家から出た女性、兄弟の家を訪れた場合、絶対に兄弟の妻に對して弱いものである。ここにも居住條件というものが血縁關係に對して強い機能をもつていることが指摘でき、ヒンドウ「家族」と日本の「家族」の相違がよくみられるのである。

ヒンドウ「家族」は、父系血縁を軸とするものの、その女性成員の子供、母の兄弟などという、その「家族」にとつては父系血縁者でない血縁者が密接に結びついている——父系血縁者同士の關係にまさるともおとらないほど——こと、更に、同様にその父系成員でない妻たちが、「家族」成員となつていくことによくあらわれている様に、「家族」は排他的な父系血縁集團ではない。この「家族」のレベルで、何らかの方法で、何らかの時に（たとえば家族神の祭といった様な）、父系成員のみが集つて事を行うということは全然ない。父系制の原理は、ヒンドウ「家族」というものの基本構造を支えているものであるが、現實に排他的に集團として何らかの機能をもつ嚴密な父系血縁集團というものは存在しないのである。

### 3 アミン一族

#### ——農村における「大家族」的集團——

ナンディ一族、チャクロバティ一家の様に、一族の富を築いた者が、末長く子孫が一族として榮える様に、死後子孫による財産の散逸を防ぐとして、土地（財産）の大部分を「家族神」の所有とし、トラスティ・エステイトとして法的に不分割の處置をとつたために、その後の子孫たちは、この財産を中心として、「大家族」的つながりを緊密につづけている場合が少くない。しかし、一方、同じ様に一族の富を築いた者が、子孫による財産争いをさけるために生前、それぞれ息子に分割を決定している例もある。この典型がここに紹介するドラプール Drapur のアミン Amin 一族である。しかし、興味あることは、この様に明確に財産を分割したのにも拘らず、子孫たちの大部分は、生地に住みつづけ、實際に「大家族」的雰囲気をもちつづけていることである。

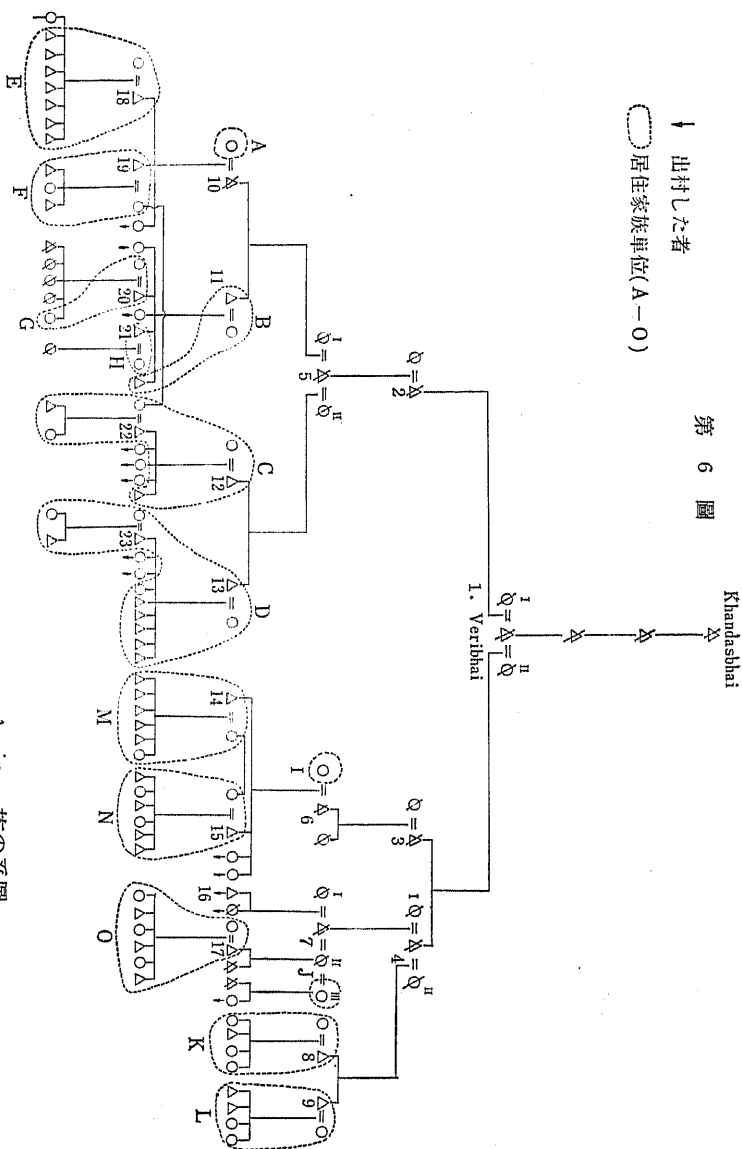
この一族の由來は、今から約一五〇年前、その祖先 Kandashhai が當時のバロダ Baroda 王から、この地の置かれた王室の穀倉を司る長官に任命され、一三〇〇ビガの土地（このドラプール Drapur 村の八〇〇ビガとクルジャン Kuljan 村とダボイ Daboi 村の五〇〇ビガ）を封土として受けて以來、ドラプールに居住する様になった。「アミン」 Amin の稱號はこの時與えられたものである。とくに、四代目のベリバイ Veribhai の時代、非常に榮え、現在のアミン一族の住んでいる城の様な三階建の大邸宅はベリバイによつて建てたものである。

ベリバイ（第四代）の子孫の數はその後増大し、現存するアミン一族は、全部で七五名（妻を含む）、一五の小家

## 第 6 圖

↓ 出村した者

○居住家族單位(A-0)



Amin 一族の系圖

族からなり、現在の小家族の長は六・七・八世代に當る（第6圖の系圖參照）。財産はすべて小家族毎に分割されており、邸宅もそれぞれの小家族に分割されている。アミン一族はナンディ一族、チャクロバティ一家の場合とちがい全體として何ら共有財産をもっていない。この意味で、この一族は「大家族」とよぶことは出来ない。しかし、後述する様に、彼ら一族はお互に驚くほど親近な關係にあり、その人間關係、日常生活のあり方は、ナンディ一族、チャクロバティ一家に非常に似ており、彼ら自身も一族を「我々 *Kwumbi*」（家族）とよんでいる。

この一族における財産の分割は、既婚の兄弟が二人以上ある場合には、必ず父が生前兄弟の均分相續による分割をきめており、兄弟間あるいは一族の間で財産をめぐる不和、または複雑な問題が起らない様に配慮されている。この様に、大きな財産をもつた場合、兄弟間の財産争いを防ぐため、また財産の散逸を防ぐために、不分割の處置をとるものと、兄弟間の財産争いを防ぎ、お互の依存心をチェックするために、生前父が分割を行う場合がある。

兄弟による均分相續はヒンドゥ社會の鐵則であるが、その對象によつて必しも均分がうまくでなかつたりして、父亡き後の財産分割は屢々兄弟間の紛争をひき起したりするのである。カルカッタの上層のインテリには、不動産を残しておく、亡き後、それをめぐつて息子たちが醜い争いをするのを恐れて、相當な富をもつにも拘らず、一生借家住いをしている者もある程である。

アミン一族の場合は、四代のベリバイまでは、各代、息子が一人であつたため問題はなかつたが、ベリバイは二人の妻から合計三人の息子をもち、彼は晩年、一八七二年、その財産をこの三人の息子に分割を決定したのである。これは、母の異なる息子たちが彼の死後同一財産共有體を存續させる可能性のむづかしさを察知したのかもしれないが、以後アミン一族では、この父の生前息子の相續分を決定する（實際の分割は父の死後）方法がずつと行われる様にな

つたのである。

ペリバイのとつた、彼の財産の分割方法は三人の息子に均分ではなく、彼の二人の妻をとおして二分され、第一夫人の一人息子には $\frac{1}{2}$ 、第二夫人の二人の息子には、それぞれ $\frac{1}{4}$ とした。

それ以降、各世代この方式によつて財産分割をするのが、この一族の習しとなつている。例えば、 $\frac{1}{4}$ を相續した(4)は、更に晩年、第一夫人の一人息子に $\frac{1}{2}$ 、第二夫人の二人の息子にそれぞれ $\frac{1}{4}$ を與えている(一九一五年)。 $\frac{1}{2}$ の財産を相續した(7)は三人の妻から合計、息子四人をもつたが、そのうち二人は早世し、(16)は(7)の存命中、父と不和になり喧嘩をし、財産相續權を放棄し、出村した(約三〇年前)ため、の財産はそのまま(17)に相續された。

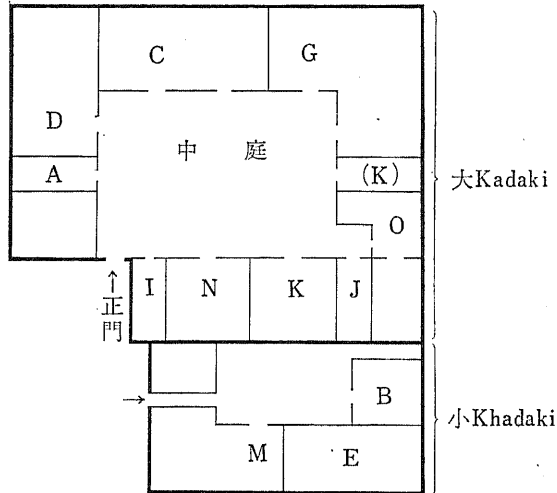
他の男子成員の場合も、すべてこの方式で父の生存中に財産分割が行われているので、妻子をもつ兄弟が二人以上ある場合は殆んどそれぞれの小家族毎に獨立した財産體を構成し、この一族では珍らしく居住單位と財産單位が一致している。

現在この居住單位は、一五に分れている。その内容は、系圖(第6圖)、邸宅の見取圖(第7圖)および次の表をみられたい。

以上一五小家族のうち、三家族(F・H・L)のみが村外に居住している。また、このうち三戸(A・I・J)が未亡人一人からなつている。この未亡人たちは、それぞれ生活に支障を來さない程度の收入源(土地)を與えられ、實際にも獨立の生活をしている。しかし、村外にいる者の土地、および、この未亡人の土地は、在村の近親の男子が管理運営をしている。

第 7 圖

ヒンドゥー「家族」の實態とその構造分析



大 Khadaki は 2 階建の大邸宅であるが、居住には殆んど 1 階のみを使用、O のみが 2 階 (K の 2 階 J の横の倉庫の 2 階) を居住にあてている。D. C. G. は広いスペースがあるが、一部は倉庫などになっており、実際の居住面積は N. K. と殆んど同じである。A の大きさのスペースは 10 畳位である。それぞれ何室かに仕切つて使用している。小 Khadaki は後に新しく附設された部分である。

Amin 一族 (1963 年 12 月現在)

(家長) 家族人数

A (10)	1	(10 の未亡人のみ)
B (11)	3	
C (12)	6	
D (13)	12	(うち、2, 3, 4 男は大學寄宿舎)
E (18)	9	
F (19)	5	(Baroda に在住)
G (20)	3	
H (21)	2	(Baroda に在住)
I (6)	1	(6 の未亡人のみ)
J (7)	1	(7 の第 3 夫人のみ)
K (8)	6	
L (9)	6	(Ahmedabad に在住)
M (14)	8	
N (15)	8	
O (17)	8	
合計	75 人	15 小家族

註 16 は當然アミン一族であるが、父生存中不和となり財産相続権を放棄して、30 年前この一族を去つてしまつた (現在 Baroda に居住)。

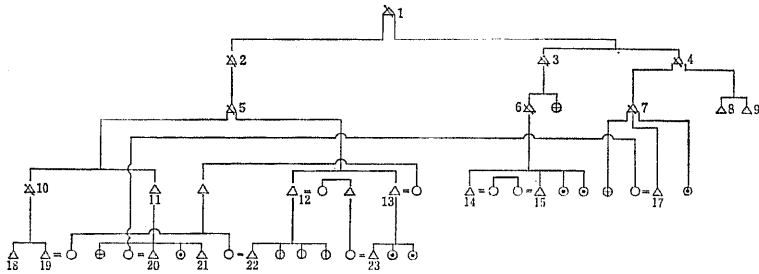
財産としての土地は、全體として、第一代の Kanbasha の時代より増減はあつたものの、現在でもアミン一族の土地は全部で約一三〇〇ビガほどあり、初期の時代と絶對量においてあまり變つていない。平均一家族六〇ビガほどになり、この土地からの収入だけでも生活には困らない。そのためか多くの成人男子が在村をつづけ、都市に移住して職をもつものが少い。またベンガル地方に比して、この地方はどちらかと云えば、教育水準も低く、また就職の可能性も低いことも考慮すべきであろう。

この小家族は、財産的にそれぞれ獨立してはいるものの、祖先の建てた大邸宅を分割して居住している。(第7圖参照) このあり方は全くナンディ一族と似ている。一戸、一戸獨立した家屋をもたず、アパートの様にして住んでいるわけで、朝から晩まで、みな顔を合わせ、お互にお茶によびあつたり、密接な關係を續けている。とくに、村落全體の構成からみると、彼ら一族の大邸宅は村の中央に他の家々を睥睨して聳え、門と高い厚い壁によつて、他の村民の住居から隔絶されている。このために、他の人々に對し、一族としての社會的結合は自然強く、村落内に獨得な世界をもっている。彼らは、農地の管理上、わづかに經營に當る男子成員がその耕作者である貧農たち、また生活上必要な諸職業カーストと接觸をもつたり、村の運營の中心として行政的な仕事の中心となることの他は、村民との接觸はない。特に女性成員は、この邸内がすべての場となつている。彼らはむしろ、仕事と婚姻の關係で他村のこうした同じ様な「大家族」あるいは「一族」と強い社會的關係にたつている。

興味深いのは、他村の一定の一族と二つ以上の婚姻關係を結んでいる場合が多く、この方法によつて、散逸化の傾向をもつ一族の各小家族が再び婚姻によつて結ばれ、父系男子成員による血縁關係のみでなく父系女性成員をおし、緊密な關係につながつてゐることである。



第 8 圖



△ X 村の同 - Kutumb に嫁した女  
 ○ Y 村の同 - Kutumb あるいは Caste に嫁した女  
 ⊙ Z 村の同 - Kutumb あるいは Caste に嫁した女

ヒンドゥー「家族」の實態とその構造分析

第8圖の婚姻關係によつてもわかる様に、アミン一族のなかでも比較的父系關係の遠い 20 (G) と 12 (O) は、それぞれ妻が姉妹であることによつて、ぐつと關係が親密になつてゐる。同様に 19 (F) と 22 (C) の妻は姉妹であり、さらに彼女らの叔母は 13 (D) の妻であることによつて、この三家族は F・C・D より親密度を増し、更に、12 (C) の妻と 23 (D) の妻が叔母姪の關係であるために、C・D は増々近親關係の密度が高くなつてゐる。また 14 (M) と 15 (N) の兄弟はそれぞれ姉妹との結婚であり、その兩家族の近親關係の密度の高さはいうまでもない。

この様な近親にある妻たちの關係に加えて、娘(姉妹、叔母)たちの嫁ぎ先の共通性による相互の關係も注目すべきである。11 (B) の娘、14・15 (M・N) の叔母、17 (9) の姉は他村の同一族に嫁しており、彼女らをとおして、この三グループの關係は深くなる。同様、11 (B) の娘、13 (D) の娘二人、14・15 (M・N) の姉妹 2 人、17 (O) の妹、合計六人は、同一村落の同一カースト(一族としては一つではないが)に嫁しており、12 (C) の娘三人も同様な結婚をして同一村落に在住している。この様な同一族から同一村に嫁した女性たちの親密さは非常に強いものであり、また彼女らが屢々里歸りしたり、反對に彼女らの兄弟たちが彼女らを訪れることによつて、

一族の結合をより強める働きをなすのである。

以上考察した様に、アミン一族は一五の居住家族に分れており、それぞれが獨立した財産體を構成し、一應別個に生活しているとは云へ、アパート式近隣集團を形成しているばかりでなく、父系による男女の血縁關係は、その驚くべき婚姻のネット・ワークと交錯し、一族の結合にあらゆる意味で貢獻している。これは近隣集團を構成している日本の「同族」などという集團とは、質的に比較にならないほど強固な成員の結びつきがみられるのである。日本の場合の様に、經濟關係とか日常の相互依存などということは、一族の結合の基盤ではなく、それ以前の父系血縁の強さ、婚姻組織、カースト制などに支えられた根強い集團と云わなければならない。彼らは、この様に財産を分割し終つてもなおこの一族を、財産を分割しない場合と同じ様に「大家族」*Kutumb*とよび、これこそが、「我々の家族」というものであると云う。こうしてみると、財産不分割のみが「大家族」存続の理由ではないことが明らかになるのである。

(一九六七年一月一五日稿)